

《公開シンポジウム 2024-2 報告（月例サロン通算 337 回）》

部活動で学んだことを語ろう！

—筑波大学附属高校蹴球部の近現代を中心に—

- 名 称 : サロン 2002 公開シンポジウム 2024-2
「部活動で学んだことを語ろう！—筑波大学附属高校蹴球部の近現代を中心に」
- 主 催 : 特定非営利活動法人サロン 2002
- 後 援 : 日本部活動学会、桐窓サッカー倶楽部
- 協 力 : 日本サッカー史研究会
- 日 時 : 2024（令和 6）年 11 月 23 日（土祝） 14：30～17：00（14：00 受付開始）
注）17：00～19：00 同会場で懇親会 ※会費 2,000 円は当日徴収します
- 会 場 : 筑波大学附属高等学校「桐陰会館」 ※オンラインでも参加できます
- 登壇者 : 高橋 正紀 岐阜協立大学経営学部（スポーツ哲学）
朝倉 雅史 筑波大学人間系（スポーツ経営学）
※中塚 義実 筑波大学附属高校／NPO サロン 2002 理事長（スポーツ社会学・教育学）
※コーディネーター兼
- 参 加 費 : 1,000 円(サロン 2002 ファミリーと学生は無料です)
- 参加申込 : イベント運営管理サイト「Peatix」よりお申し込みください。
<https://peatix.com/sales/event/4139494/tickets>
- 参考資料 : NPO 法人サロン 2002 2024 年 5 月公開サロン報告書
大戦前の日本サッカーと二つのルーツ校—東京高師と東京高師附属中
https://www.salon2002.net/src/pdf/monthly_report/2024/2024-5.pdf

公開シンポジウム 2024-2 参加者 計 28 名(敬称略)

◎はNPOサロン2002会員、○は会員外のサロンファミリー、無印はファミリー外（11/23時点）

■対面参加（計 25 名） ※うち懇親会参加は 22 名

- ・登壇者 3 名... ○朝倉雅史、高橋正紀、◎中塚義実
- ・筑波大学附属高校蹴球部卒業生 14 名（氏名の前の数字は卒業回）... 78 菅原博、80 留岡伸一、103 池田知之、103 嶋田淳、103 木田圭亮、103 横山浩太郎、103 寄田浩平、◎104 関秀忠、○106 大河原誠二、106 西片淳、111 大澤潤一郎、○111 小野塚隼平、◎116 柳井隆志、○121 遠山諒
- ・同 在校生 2 名（いずれもフットサル部）... 中川結理（高 1）、志村大輔（高 2）
- ・上記以外 6 名... ○安藤 裕一、小池正通、◎小池靖、◎嶋崎雅規、○丸山実花、○皆川宥子

■オンライン参加（3 名）

- ◎高原渉（宝塚.F.C.）、浦井智治（NPO法人吉川みらいのブカツ）、神谷拓（関西大学／日本部活動学会会長）

参考1) Peatixの事前申込は28名。うち欠席が、対面3名、オンライン1名の計4名。

登壇者2名と高校生2名を加えた参加者は上記のとおり。

参考2) 事前申込28名のうち、サロン2002ファミリーは14名、ファミリー外は14名。

参加費収入は1,000円×14名＝14,000円

<開催趣旨>

待ったなしの部活動改革が進んでいます。教育課程外であるにもかかわらず、日本の学校教育の中で大きな位置を占めてきた部活動は、以前のままでは存在し得なくなっています。

2017年12月に発足した日本部活動学会の設立趣意書には、部活動をめぐる諸課題として「児童生徒の負担の問題（家庭での時間や自由時間が少ない等）、顧問教員の過重負担、教員の全員顧問制と児童生徒の強制加入、過酷な練習や体罰、外部指導員との連携や質的向上、部活動指導員（職員）の確保、保護者の理解と協力、大会や練習時の送迎の問題、選手育成か教育かという目的に関わる問題など、多様な問題や課題」が指摘されています。まずは中学校から部活動の地域展開が進行していますが、高校や大学にも影響は及んでいます。

担い手が地域であろうと学校であろうと、青少年が好きなことに取り組み、仲間とともに過ごす場は必要です。部活動には「居場所としての意義」があり、試合の勝敗とは別の「何かが育まれてきた」ものと考えます。

本シンポジウムでは、卒業生が語る「部活動で学んだこと」を通して、長い目で見た部活動の意義や改善点を明らかにすることを試みます。主な舞台は筑波大学附属高等学校蹴球部（旧東京高等師範学校附属中学蹴球部）で、今年2月に創部100年を迎えた歴史と伝統を持つクラブです。Jリーグ発足前後から日本サッカーのメジャー化が進む中、同部は、サッカーとフットサル、男子と女子、現役と卒業生が連携するクラブとなり、多様な活動を展開しながらさまざまな分野に人材を輩出してきました。卒業生のコメントと学術的な考察を交えながら、部活動の可能性と課題を明らかにしていきたいと考えます。

シンポジウム終了後は、同会場にて懇親会を企画しています。部活動のいまとこれからの、多くの方々とざっくばらんに語り合えることを願います。（中塚義実）

◆オープニング 14:30～14:40

◆第1部 部活動改革をめぐる現状と課題

一部活動で何を学ぶか(概論) 14:40～15:20

①高橋正紀

②朝倉雅史

◆第2部 筑附高蹴球部の近現代史 15:20～16:30

①中塚着任からDUOリーグ創設まで(1987～95)...103回

②チームからクラブへ一歩探りの挑戦(1996～2008)

105～107回 DUOリーグ発足。大会の位置づけ等でさまざまな議論。106回

108～110回 フットサルの浸透。「引退なし」をめぐって。合宿地変更等

111～113回 女子部創設。3部門確立。2002年FIFAワールドカップ ...111回

114～117回 クラブとして充実。117回サッカー部は「サル」から進化 ...116回

③校内的な承認以降—安定と停滞(2009～24)

118～123回 人数多いがコミュニケーション不足。諸課題噴出 ...121回

124～128回 諸課題山積～「ゼロからのリスタート」。生徒主導の限界

129回以降 コロナ禍による断絶。顧問の代替わり

高校2年生(134回見込) 校内フットサル大会をめぐって ... 高校2年生クラブ長

◆ディスカッション 16:30～17:00

シンポジウムの概要

【テーマ設定の意図】

1) 部活動の意義を、卒業生の視点から考察したい

卒業生と話をするとき必ず「高校のサッカー部で学んだことが、いつも自分の根っこにある／社会に出て役に立った」という話になる(ネガティブな印象を持つ者と会うことは少ないのだから)。

部活動には、「結果」だけでなく「過程」そのもの(日々の活動、他の諸活動とのバランス、仲間や指導者との交流、一つひとつの小さなエピソード…)に大切な「学び」がある。そのときは気づかなくても、卒業後何年たっても残っている「本質」の形成に貢献していると思う。

教育の成果について、短期的な評価が求められる傾向にある。しかし「本質」についての成果をみるには時間がかかるし、卒業後何年たってもはじめて気づくこともある。

それらを卒業生から引き出し、部活動の意義を、長い目でみて考察し、共有したい。

2) 1987～2024の38年間の蹴球部の足跡を残しておきたい(大戦前については報告済)

中塚の“定点観測”は、学校の部活動、スポーツ指導の現場の記録として貴重である(と思う)。

- ・サッカー界が、地域に根差したプロ化(クラブ育成)を打ち出し、メジャースポーツに成長した時期である。それによって学校現場はどうなっていたのか。
- ・プロリーグ発足と高校サッカーの将来を見据え、先駆的に取り組んだことは、何をもたらし、いまどのようになっているのか(リーグ戦の導入／チームからクラブへ／卒業生との連携など)。
- ・青少年を取り巻く社会環境や自然環境の変化が、ヒトとしての成長に及ぼす影響を危惧する。部活動改革の議論にも通じるものである。一石を投じたい。

シンポジウムの進行

1) オープニング 14:30～14:40

2) 第1部 部活動改革をめぐる現状と課題 一部活動で何を学ぶか(概論) 14:40～15:20

- ① 高橋正紀…
- ② 朝倉雅史…

3) 第2部 筑附高蹴球部の近現代史 15:20～16:30 注) 【 】はコメントしてほしい方(案)

- ① 中塚着任からDUOリーグ創設まで(1987～95)
 - 96～104回 中塚は現役選手。体を張ってひたすらやっていた【103 寄田浩平】
- ② チームからクラブへ手探りの挑戦(1996～2008)
 - 105～107回 DUOリーグ発足。大会の位置づけ等でさまざまな議論【106 大河原誠二】
 - 108～110回 フットサルの浸透。「引退なし」をめぐる。合宿地変更等
 - 111～113回 女子部創設。3部門確立。2002年FIFAワールドカップ【111 小野塚隼平】
 - 114～117回 クラブとして充実。117回サッカー部は「サル」から進化【116 柳井高志】
- ③ 校内的な承認以降—安定と停滞(2009～24)
 - 118～123回 人数多いがコミュニケーション不足。諸課題噴出【121 遠山諒】
 - 124～128回 諸課題山積～「ゼロからのリスタート」。生徒主導の限界
 - 129回以降 コロナ禍による断絶。顧問の代替わり
 - 高校2年生(134回見込) 校内フットサル大会をめぐる【高校2年生のクラブ長】

4) ディスカッション 16:30～17:00

登壇者プロフィール

【演者】

◆高橋 正紀 (岐阜協立大学経営学部、スポーツ哲学)

1963年神奈川県出身。神奈川県立厚木高校から筑波大学、同大学大学院(スポーツ哲学)を経て、1987年から岐阜経済大学(現岐阜協立大)専任教員。1987年～2017年同大学サッカー一部監督/JFA A級コーチ(2012年総理大臣杯東海代表。サッカーで生計を立てる主なOB: J1新潟・谷口海斗、REGATEドリブル塾・奥平卓也、比嘉翔也)

1996～97年にケルンスポーツ大へ留学。現地リーグでの Goodloser 体験をきっかけに“スポーツパーソンのこころ”の探求を開始し、2007年以降体育授業とサッカー部指導で活用すると共に全国各地への伝達を始める。2012年に講義の効果を『スポーツマンのこころ』の講義理解後のスポーツ実践が生きがい感と自尊感情へ与える影響』で医学博士論文(岐阜大学)で実証。伝達実績は2024年10月末で1,012回72,400人が受講。現在も講演活動を継続すると共に、2024年4月からは人材育成支援を目的とした「ひとつ株式会社」を設立し、さらなる伝達普及活動に邁進中。(一般社)日本スポーツマンシップ協会副会長・NPO法人バルシューレジャパン理事。

◆朝倉 雅史 (筑波大学人間系、スポーツ経営学)

1984年、東京都出身、実家は文京区小石川(附属高は徒歩圏内)。筑波大学大学院人間総合科学研究科体育科学専攻単位取得退学、早稲田大学グローバルエデュケーションセンターを経て、現在、筑波大学人間系教育学域助教、博士(体育科学)。小学校～大学までバスケットボールに精を出す。その後、体育学・教育学の研究へ。その際、2008～09年にかけて附属高に通い詰めて調査。

『ホワイト部活動のすすめ—部活動改革で学校を変える』教育開発研究所、「子供と地域を育てる地域スポーツクラブ活動のあり方」(友添編『運動部活動から地域スポーツクラブ活動へ—新しいブカツのビジョンとミッション』大修館書店)、『『地域移行』による格差に備える自治体・学校の検討点』『教職研修2022年8月号』、「運動活動の地域移行をめぐる課題とスポーツ推進委員」『みんなのスポーツ478号』、「多様化する運動部活動と地域との関係性」『みんなのスポーツ438号』等で部活動改革について論稿執筆。スポーツ庁「地域クラブ活動への移行に向けた実証事業における調査・分析チーム」のコアメンバー。

【コーディネーター】

◆中塚 義実 (NPO法人サロン2002理事長/筑波大学附属高校教諭、スポーツ社会学・教育学)

大阪府茨木市立南中学校、大阪府立三島高校、筑波大学でそれぞれサッカー部・蹴球部で熱く活動。大学院時代は茨城県立竹園高校サッカー部の外部コーチ、地域クラブの筑波学園バルバロスを主宰しながら、筑波大学蹴球部OBで構成されるジョイフル本田サッカー部でプレーする。

1987年より現職。保健体育科教諭・蹴球部顧問として、還暦を過ぎて再雇用者となったいまも定点観測続行中。卒業生は様々な分野で活躍。卒業生との交流を人生最大の喜びと位置付ける。

1995年度より東京都サッカー協会フットサル委員(ユース部会長)。1996年度に東京都内でユースサッカーリーグ(DUOリーグ)を創設。1997年度よりサロン2002の活動開始。2014年度にNPO法人化。

著書に『少年のためのサッカー入門』(長岡書店)、『日本のスポーツ界は暴力を克服できるか』(かもがわ書店)、『運動部活動の理論と実践』(大修館書店)など。

日本部活動学会理事。日本ヤタガラス協会副会長。

オープニング

中塚：皆さんこんにちは。NPO 法人サロン 2002 理事長の中塚義実です。「部活動で学んだことを語ろう」というシンポジウムを、「筑波大附属高校蹴球部の近現代を中心に」というサブテーマで取り上げます。筑波大学附属高校の教員をこの 3 月で 38 年間、勤めあげることになります。そのタイミングで、このシンポジウムを企画しました。いまから 2 時間半、密度の濃い時間を過ごしたいと思いません。

本シンポジウムは、日本部活動学会の後援をいただいています。神谷拓会長がオンラインで参加されます。同じくご後援いただいた桐窓サッカー倶楽部ー筑波大学附属高校蹴球部の OB 組織からは、菅原会長はじめ、多くの卒業生が会場にお越しくださいました。オンラインにも数名いらっしゃいます。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

登壇者のお二人をご紹介します。お手元の資料の 4 ページにプロフィールがあります。

まずは高橋正紀さん。岐阜協立大学経営学部で、学生時代は筑波大学蹴球で私の一つ下の後輩で、特に大学院のころはしょっちゅう一緒につるんでいた仲間です。

高橋：岐阜協立大学の高橋と申します。中塚さんとは学生時代、先輩なんですけど同級生のような、そういう深いお付き合いをさせていただきました。この学校にも何度も来させていただいて、今回もお声かけいただきました。今日は私の専門としているところに関して少し情報提供させていただきます。よろしくお願ひします。

中塚：もうおひと方。いまの所属は筑波大学人間系スポーツ経営学の朝倉雅史さんです。朝倉さんもこの学校と深い関わりがありまして、ちょうど 119 回生が高校 1 年生のころ、半年にわたって私にずっとくっついて、教師は何をやっているのか、教師の「信念」についての研究をされました。

朝倉：筑波大学の朝倉です。先ほど中塚先生からご紹介いただいた通り、2008 年、半年ぐらい筑波大学附属高校に通い詰めて、中塚先生を研究するというユニークな研究をさせていただきました。いま思うと、中塚先生のお部屋に伺ったときの本の多さと、積み重なった書類の山にびっくりした思い出があります。今日はその恩返しのためにお話をさせていただこうと思っております。どうぞよろしくお願ひします。

中塚：本日の進行を確認しておきたいと思ひます。まず第 1 部として、部活動改革を巡る現状と課題、部活動で何を学ぶかの「概論」ということで、高橋さん、朝倉さんの順でそれぞれ 20 分ぐらいずつ、部活動の置かれている現状だったり、可能性と課題だったりを挙げていただき、後半の議論に繋げるベースとなるような論点を示していただきたいと思います。それに続いて第 2 部では、筑波大学附属高校蹴球部の近現代史を、私の方で用意したスライドを用いて振り返ります。1987 年度、附属高校の卒業回数で言うと 96 回生が 3 年生のころから、つい先日行われた新人戦のあたりまで、私が顧問を務めた 38 年間の振り返りです。

第 2 部では卒業生の皆さんからコメントをいただきながら進めます。いや、卒業生だけじゃないですね。今日は高校 1 年生と 2 年生も来ていますので、彼らからのコメントもちょうだいします。

ではさっそく第 1 部です。高橋さん、よろしいですか。

第1部 部活動をめぐる現状と課題

1. 高橋正紀

改めまして皆さんこんにちは。私の方からは「部活動を俯瞰する」というタイトルでお話しさせていただきます。専門はスポーツ哲学です。現場でも大学サッカー部の監督をずっとやってきましたし、体育教師が自分のアイデンティティです。ほとんどの人が、部活がどういう位置にあるのか理解されていないのが現状です。そのあたりを、私が専門とする「スポーツパーソンのこころ」と「グッドルーザー精神」を中心にご説明していきたいと思えます。

1) グッドルーザー体験から「スポーツパーソンのこころ」まで

グッドルーザー体験についてお話ししたいと思います。私は1年間、ドイツのケルンスポーツ大学に留学していました。勉強をいっぱいしましたが、現地でアマチュアチームに入って1年間プレーをしてきました。そのときの衝撃的な体験です。

ディフェンダーとして相手のエースをマークして、1試合マークしきって1点も取らずに私のチームが勝ちました。試合が終わって挨拶して帰ろうとしたら、私がマークしていた相手が私の方に寄ってきて、ちょっと恐怖を感じて何をされるのかかと思っていたら握手を求められて、「今日の君の守備は素晴らしかった」とほめられたんです。

相手はサッカー大国で、日本はワールドカップにも出ていないことです。一流ってこういうことだなと思うと同時に、こういうスポーツのあり方こそ重要なんだろうなと思ったんです。グッドルーザーになれるということが。しかし日本ではグッドルーザーという言葉は知られていません。

これまで北海道から沖縄まで千回以上、全国で講義をしてきました。合計して7万数千人です。けど焼け石に水ですね。日本にグッドルーザーの概念が存在していないから。だから阿部詩さんも試合が終わった後に負けて号泣してしまいました。

でも知ったら変わります。受講生の中で最年少は小学校2年生です。講義を聞いた翌日に、試合に負けた後に1人だけ相手ベンチに行行って「ありがとう」って言って握手を求めたそうです。

かっこいいですね。いさぎよい。でも日本では知識すらないからできっこない。これを何とか伝えたいなと思って帰ってきたわけです。

どういうふうに捉えたかということ、自らが望まない出来事に対する態度ですね。予期しない出来事

成長マインドセット
スポーツパーソンのこころ①
自分自身との関わり
自分が大切だから
万事に対して
自分で決めて101%で
粘り強く取り組み続ける
こころ
自分がたのしみ続けるために必要となる戦闘精神

成長マインドセット
スポーツパーソンのこころ②
仲間との関わり
自分が大切だから
余裕がない厳しい状況でも
仲間を助けることができる
こころ
自分の「たのしい」のためには不可欠となる自己犠牲

成長マインドセット
スポーツパーソンのこころ③
ゲームでの望まぬできごとへの対応
自分が大切だから
マイナスの感情をコントロールして
皆のたのしさやゲームを
絶対に壊さない
こころ
自分の「たのしい」のために、みんなの「たのしい」を守る自己抑制

が起きたときにどういった態度を取れるのか。これはかつての武士道精神だということにを、ずっと探求を進めていく中でたどり着きました。これを復活させたい。こういうのをベースとするスポーツであれば、かなり役立つぞということですね。

そして「スポーツパーソンのこころ」という解にたどり着きました。

今日皆さんにお話するのは、部活の位置を客観化する、自分の位置を客観化するということです。それができないと話がごちゃごちゃになってしまいます。そこからグッドルーザー精神に繋がり、「自分を大切にすればいい」という、最も大切なことにつながるわけです。

成長マインドセットのスライドに示した三つが「スポーツパーソンのこころ」の中身ですが、今日はその中身に触れる時間はあまりありません。「日常と非日常」について整理しながら部活動を俯瞰して、大枠のところを確認しておきたいと思います。

2) たかがスポーツー世界の常識

最初に世界の常識ということで、ユルゲン・クロップがインタビューで言っていたことをご紹介します。(英語のインタビュー)

“It’s only Football.”

たかがフットボール、たかがスポーツ、それ以外の何物でもないということを言っています。

私はJリーグの仕事にも携わっていますが、日本のJリーグの監督で「たかがスポーツ、たかがサッカーですから」と言える人がいるでしょうか。

私に言わせると「俯瞰できていない」ということです。

かつてそういう論調はあったのですが、「たかがスポーツ」に「されどスポーツ」までつけちゃって、やっぱり「されどスポーツでしょう」みたいな理解となっています。

この位置づけが明確でないと、いろいろややこしいことが起きてくるわけです。

プロスポーツ選手はすごく価値が高いことをやっているし重要だけれど、エッセンシャルワークではありません。コロナの頃を思い出してください。優先順位をつければ、エッセンシャルなものでないことは明らかなわけで、世界ではそれが常識になっています。

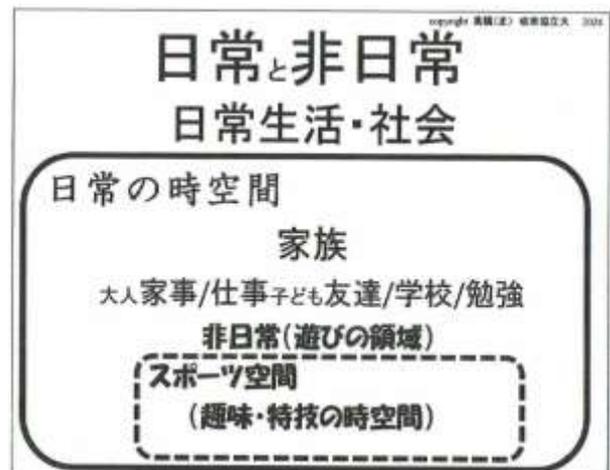
これを理解するために「日常と非日常」の俯瞰図を作ってみました。少し説明したいと思います。

3) 日常と非日常

外枠が世の中全体だというイメージです。そして日常の中でまず中核になるのが家族ということです。家族なくして人間なしと私は思っています。養護児童施設でも疑似家族を作って育てるわけですから、家族は中核ですよ。家族の価値を取り戻したいと思ってるぐらいです。単純に考えて、世の中の日常における中核は家族です。

その家族の中で、大人たちの日常は何かというと、家事とか仕事を日々繰り返しているということです。それが家族の中の日常です。子どもたちはまだ社会に出ていませんので、学校や友達、学校へ行って勉強するということを日々繰り返しているわけです。これが日常という位置づけになります。

この日常の中に非日常という時空間を作って、そこでスポーツをしているということです。この点線は、スポーツの場合ルールだと考えてもらおうと理解がしやすいと思います。もちろんスポーツだけでない趣味や特技、いろいろなものと同じ非日常の空間に入っているということです。



ただ、「日常の中に非日常がある」というところが大きなポイントで、日常が壊れると非日常は味わえなくなります。たとえば個人的に大怪我をする、ものすごく貧乏な状態である。そういう状態だと非日常を味わえなくなります。あるいは社会が壊滅的な状況である。たとえば戦争が起きている。こういうことだと非日常を味わえないですよ。だから「日常あつての非日常だ」ということが、このような説明を受けないとなかなか理解できないんですね。

非日常だけになっちゃってる「スポーツだけ高校生」や、うちの大学もスポーツ推薦組が多いんですけど、そこが全てだと思っている。でも「日常あつての非日常だ」ということなんです。

もう少し説明を加えていくと、「日常ってマストだよ」ということです。しなければいけない。

一方、非日常はしなくてもいいことなんです。しなくてもいいことで、けど皆さんも部活やってたときに、私もそうでしたけど、夢中で大好きで生きがいにもなり得るような領域ですよ。でもすごく冷静にみると、しなくてもいいことです。だから実際にやってない人もいます。

日常はどういうことが求められるかという、当たり前のことを当たり前で繰り返すところであり、結果を出せないと単純に困るんです。仕事で結果を出さないとイケませんし、クビになったりするということなんです。私は中小企業経営などを中心にだいぶ長く経営学の勉強もしていますが、「日常は結果だよ」「仕事で結果出さないとね」という話になってきます。子どもたちも、テストで0点ばかり取っていると「ちょっとやばいよね」ということです。

それに比べて非日常はどうかというと、「好きなことに取り組めるありがたいところ」です。日常あつての非日常ですから、日常がちゃんと機能して、なおかつお金に余裕があつて時間に余裕があつて体力に余裕があると、スポーツだとか好きなことができるんです。ありがたいよねっていうことです。「ありがたい」と思ってスポーツができるか、「渋々やらされてる」というのでは全然違う状態です。趣味の領域でも特技の領域でも全く一緒です。結果を出せないと当然悔しいんですけど困らない。ものすごく悔しいけど、結果が出ないからといって困るような状況にはならない。

できることを増やした方がもっと楽しめるから、どんどん練習して少しでもうまくなろうとします。そしてその中でピカピカになって、ものすごい力を発揮していろんな人から認められ、プロから誘いが来ると、日常のプロスポーツ産業に行きます。非日常から日常に行っちゃうんです。こうなると、結果を出さないとクビになる世界ですね。囲碁・将棋の世界も一緒ですよ。歌の世界、芸能界も同じです。日常を出てしまっているから結果を出せなかったらクビになるんです。

私はJリーガーにも講義をしますが、ここのところでハッとするわけです、彼らは。俺たち非日常でちやほやされて、すごいみんなに褒められてきたけれど、プロになったということは結果出さないとダメな世界に来ているんだなということを理解して、考え方が相当変わってきます。練習への取り組みも。何か二番目のものを探し出す選手がすごくたくさんいます。だから、一般論ですけど、できることを増やした方がいいよねってことですよ。できることを増やした方がいいんじゃないか、ということ。事実ですよ。説教でも何でもありません。いろんな高校でスポーツやってない生徒者にも講義するんですけど、たいがい気がつきますよ。

こういうふうな理解ができてないと、やっぱり部活やってるときにありがたいとも思えない。結果出せないと悔しいんだけど、困ることじゃない。すがすがしく、変なストレスを抱えずに、悔しさはかみしめるけど、やれるようになるということですね。これを知ってるだけでだいぶ違うんじゃないかということですね。

4) 好きなことに夢中になるということ

しかしこういうことを知らなくても、「夢中になる」ということがどういう意味を持っているかということ、イチローの引退会見から聞いてもらいたいと思います。

記者：数多くの子どもたちが見ていると思います。これから野球を始めることになります。そんな子供たちにぜひメッセージをお願いします。

イチロー：メッセージかあ。苦手なんだよな。

野球だけじゃなくてもいいんですよ。自分が熱中できるもの、夢中になれるものを見つけられれば、それに向かってエネルギーを注いでいけるので、そういうものを見つけたいと思います。

それが見つかれば、自分の前に立ちはだかる壁には向かっていける、向かうことができると思うんですね。それを見つけられないと、壁が出てくるとあきらめてしまうということがあると思うので。

自分に向くか向かないかというよりも、自分が好きなものを見つけたいと思います。

最後の、「自分に向くか向かないかというよりも、自分の好きなものを見つけたい」というところがすごく大きなポイントです。下手くそでもいいんです。こだわってそれをやり続けるということです。おまけに非日常なんだから、むしろ自分なりに、レギュラーになれようがなれまいが、自分なりに全力を出してやりきった経験値の方が遥かに重要なんです。

今日は詳しく話せませんが、どんなチームにも、強いチームにも弱いチームも必ず、才能にあぐらかいているやつがいるんです。チームの中ではいけちゃうから。才能にあぐらをかいている子たちは力がつかないですね。自分の大好きなことに対して全力でやり抜いたという経験値がつかないんです。今日は詳しく話せませんが GRIT（グリット）、やり抜く力が身につかないんです。

社会に出たときに、それが生かせないということですよ。今イチローが言ってくれたように、夢中になれるものに対して全力で向かって壁にぶつかって乗り越える。その経験が、夢中になれる、好きなものが見つかればできるということです。まさに部活っていうのはそういうような場で、私もそうでしたけど、1人でコツコツコツ練習をして、ちょっとでもうまくなってということを繰り返して、それでも試合に出れなかったりすることもあったけど、それをやり続けたこと自体に価値がある。こういうことが、位置づけも含めてわかっていないとなかなかちょっと…。

これは勉強とかでも全く一緒ですよ。頭のいい人が勉強に手を抜いてるみたいなことはどこにでもあります。自分の所属している集団の中でいけちゃうんだったら手を抜くっていうのは、生物学的にはあることかもしれません。自己保存のために。でも、非日常でスポーツをやるのであれば、全力でやり抜くことに大きな価値があって、そこに部活の価値があるんじゃないかと思います。

5) アンケート結果より

今日は日常と非日常のところだけが中心でしたが、最後にアンケートの結果をご紹介します。先日、兵庫県の神戸高校、長田高校、兵庫高校、灘高校の4校のサッカー部員に、日常と非日常の話をしました。「スポーツや趣味・特技は、日常の中の非日常で行われる遊びの一種である」ことについて、「全く初めて聞く」と答えた部員がほとんどでした。そうですね。私も大学までそういうことを学ばませんでしたので。ちゃんと知ってほしいようになっていくところです。

同じ質問を昨年、母校の筑波大学に行って、ハンド部、水球部、サッカー部数名に話をしたときに行ってみました。説明された通りに理解していたという人は高校生より多く、聞いたことがある、ある程度理解していたという人もいました。とくにハンド部では、監督の藤本君が、僕とのつながりから日頃からそういう話をしているそうで、部員の9割は普段から聞いていたから知っているという結果になっています。

次の図がプロサッカー選手です。全く初めて聞く人がほとんどです。スポーツの中に入りこんでしまっているの、客観的に自分の位置を理解することができていません。ずっとスポーツの中において

そのままプロになってしまったということです。むしろ普通の人たちの方が、日常と非日常を理解する確率が高くなります。

これとはまた違うグループですが、私の講義を聞いた半年後にどれくらい覚えていたかということを探ってみました。忘れちゃうんですね。1回聞いたときには、日常の中の非日常だということに気がつくんですけど、半年後にもはっきりと覚えてる人はゼロで、ある程度覚えてるのが数人です。これはグランパスの選手6人に対するアンケートですけど、文章を読んだらある程度思い出したというぐらいです。

私としては、スポーツも含めた非日常の趣味・娯楽の価値を生かすためにも、より楽しんでよりやり切るためにも、やっぱり俯瞰ができていないとなかなか難しいなと。それでなくても俯瞰できてなくても部活が与えてくれるところはものすごく大きいというふうに私自身は考えてます。

ただ俯瞰できたら、もっと楽しめるし、もっと有意義にスポーツや趣味や特技をやる時間を活かせるっていう感じです。これはビジネスマンで言うところの“Work Hard, Play Super Hard”です。仕事をめっちゃ頑張って、遊びのときをもっと頑張るといような感覚が、俯瞰できるとたぶんやりやすいんだと思います。そうじゃないと逆転しちゃうことがあるんです。遊びのときにかまけて仕事がおろそかになる。それはちょっと違います。仕事はガンガンやるけど、遊びはもっと没頭してやるみたいな感じです。俯瞰できてるからこそやれることなのかなということなんです。

私の方は一応こういう形で、部活を俯瞰するというお話でさせていただきました。

中塚：ありがとうございました。部活動、そしてそこで取り組まれるスポーツ、ここではサッカーが大きな文脈の中でどういう位置づけなのというところを話してくださいました。引き続き、朝倉さんからお話いただきたいと思います。

◆朝倉雅史

筑波大学の朝倉です。後半のディスカッションに繋がるように、部活動を巡る現状と課題、部活動で何を学ぶのかについてお話をさせていただきたいと思います。

ここにお集まりの皆さんに限らず、いま部活動が学校からなくなりつつある、部活動が変化を迎えているということをご存じだろうと思います。いま部活動はどのような状況にあるのか、部活動の現状と課題をまずお話しします。そして、学校に存在し続けてきた部活動では何を学んできたのか。これは後半のディスカッションのテーマにもなると思いますので、それを理論的に整理してみたいと思います。

1) 日本の部活動の現状

まずは身近な話から、部活をめぐる日常の風景です。

例えば小学生が門出の言葉で「中学校に行ったら何々部に入りたいです」って舞台の上で卒業証書をもって叫ぶこと。あと、私はいま大学に勤めてるんですけど、1年生の自己紹介では「高校では何々部に入っていました」。また大学生が就職面接で「学生時代に最も力を入れてたのは何々部での活動です」と言ったり、あるいは「〇〇銀行の就職では体育会運動部枠がある」とか。また日常的に皆さんも「部活何やってた？」という会話をするわけです。部活というのは、社会を生きる上で名刺みたいに使われることがある。それぐらい私たち日本人の生活に深く、強く食い込んでいることがわかってと思います。

そんな部活が大きな変化と改革の必要性に揺れています。それがどこから来たのかをお話したいと思います。

私が部活に関係する本を書いたときに、部活がタイトルに載った新聞記事の推移を調べてみました。2013年頃に一つピークがあり、2014～17年を経て2018年にもう1回ピークがきていることがわかります。新聞記事ですので社会の関心を凝縮したものと言えるのですが、2013年と18年の2回ピークを迎えています。

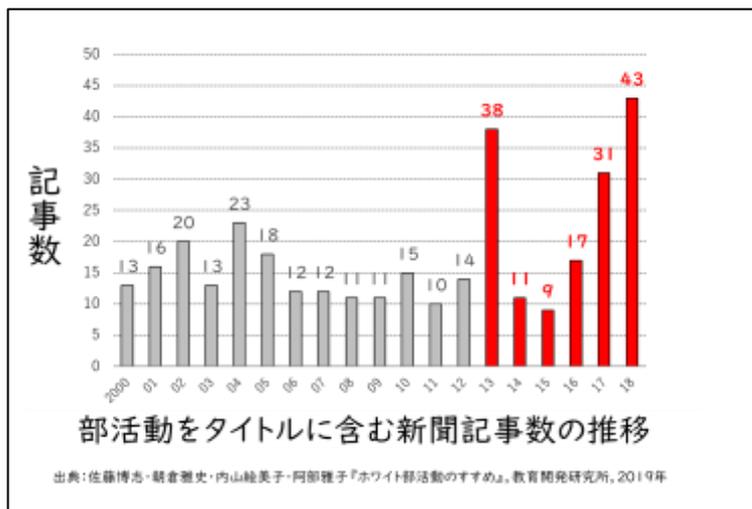
部活動改革は、以前から何回も求められてきました。部活を地域に移行することが話題になっていますが、歴史的に言うと3回目の地域移行論といえます。ただし今回の地域移行論の特徴は、強力なトップダウンかつ実現可能性を優先して進められています。そういう話が持ち上がったのが2013年頃です。

この年に何が起きたかという、大阪の桜宮高校バスケットボール部のキャプテンだった2年生の男子生徒が、自宅で自殺していた事件です。これが起こったのが2012年の暮れで、報道されたのが年明けすぐです。2013年は部活に関する衝撃的な事件から幕を開けたというのが事実で、これが引き金になって2013年に新聞記事数のピークを迎えています。

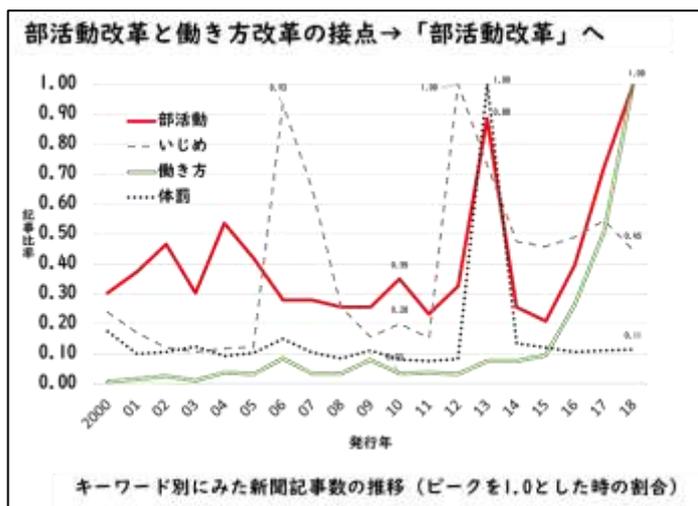
ちなみに私は小中高とずっとバスケットボールをやっていて、高校のときはインターハイに出て当たり前、優勝するかしないかという部活でやっていたので、こういう事件を引きおこしかねない光景というのが私の脳裏に焼き付いています。いまでもちょっと疲れたりすると、高校の部活の夢が出てくるんです。すごい走らされたり叩かれたりしたことです。そういう意味では、私の経験した部活動は、非常に受動的で高圧的な活動でした。先ほどの高橋先生の講義を聞いていれば私の人生も変わっていたらと思うぐらいです。桜宮高校男子バスケットボール部の事件も、さもありませんと思ったのを覚えています。

ただこれは2013年のピークの背景です。2018年にかけてはどうかというと、TALIS（OECD国際教員指導環境調査）という国際比較調査が関係しています。Teaching and Learning International Surveyで「タリス」と呼ぶんですけど、OECD（経済協力開発機構）が行っている調査です。2008年、2013年、2018年と定期的に行っているんですが、ここで各国の教員の1週間の総勤務時間が調べられました。2013年の調査結果が2014年頃に日本で報道されたのですが、調査に参加した国の平均労働時間が1週間に38.3時間。日本はどうかというと53.6時間です。アベレージに比べると1.4倍、実数で15時間以上、多く働いているということがわかったわけです。

このように国際比較してみると、日本の先生はなんて忙しいんだと。さらにその内訳を見てみると、課外活動指導時間（Extra Curricular Activity）のアベレージが2.1時間のところ日本は7.6時間、3.6倍。実数にすると5時間です。場合によってはもっとたくさんの時間をかけているかもしれません。1週間に15時間以上、アベレージと比べて教員が働いているのが日本の事実であり、その3分の1にあたる時間を部活動に費やしている。また別の質問項目で、授業準備や指導に関する時間にどれぐらい時間をかけているのかを調べたら、なんと日本の教員は、各国の平均よりも少なかったという事実がわかったんです。つまり、いかに日本の先生が忙しいか、その忙しさを部活が生じさせているのかが話題になったです。



同じく新聞の記事数です。別の調査ですが、ここでもピークが二つできています。先ほどと同じく、2013年と2018年にピークがきていますが、2013年には記事数になかったあるお題に関する記事が右肩上がりに増えていき、2018年にピークを形成しています。「働き方」というタイトルを含んだ新聞記事の数です。「働き方」と「部活動」が結びついて2018年にピークを形成しました。ちなみにこれは、教員の働き方だけでなく2015年あたりから増えています。電通の女性社員が自殺したという事件を覚えておられると思います。それが2015年に起こったんです。それが2016年に労災認定されたあたりから、当時の安倍政権が国ぐるみで「働き方改革」を打ち出していきます。その中に教員の働き方改革、そして部活動をどうにかするというのが結びついていまいに至るといのが、現在の部活動改革の原点になっているわけです。



そして2020年に文部科学省がこんな通知を出しています。学校の働き方改革を踏まえた部活動改革概要というものです。ここに休日の部活動の段階的地域移行、ゆくゆくは平日も地域に移行すると書かれています。これがあったがゆえに、冒頭でお話した、部活動が学校からなくなるという認識を世間が形成した。これが部活動の現状と課題だと言えます。

2) 海外からのまなざし

ちょっと視点を変えてみようと思います。先ほど言ったように、日本人の生活に部活は深く、強く食い込んでいますが、その実際をお見せしようと思います。

私がバスケットボールをやっていたことは先ほど申し上げたとおりですが、バスケットボールシューズは一大市場を作っていて、マニアがいるぐらいです。これは確か2000年の前半ぐらいに出たバスケットボールシューズで、ナイキが出した「Team BUKATSU」っていうシューズです。

世界を股にかける一大アパレルスポーツブランドが、日本で靴を売るために「部活」って名前をつけたのはすごいですよね。しかも売れたんです。日本人って部活が好きなんだな、部活って日本人の意識を刺激する3文字なんだなというのがよくわかると思います。

次に、海外の人から日本人の部活ってどのように見られているかです。実は欧米にはジャパノロジーという専門分野があります。直訳すると日本研究ですが、そこで究している人がある論文を書きました。ピーター・ケーブという研究者が書いたものです。

「1世紀以上にわたって、課外の部活動は社会人を育てる重要な働きを担うものとされ、その活動を通じて日本の若者は、社会でもっとも重要な価値観と信念、行動パターンを経験的に学んできた」

実はこれ、海外からみた日本人にとっての部活動の見解なわけです。

この人だけかと思いきや、別の論文でもやっぱり同じことが言われています。これは割と最近、2015年の論文です。

「課外クラブに参加している日本の学生は、参加していない学生よりも間違いなく、より肯定的な自己概念、忍耐力がある。親切、責任感がある、正直、明るい、考える、体力がある、感謝の気持ちがある、勤勉、自己主張ができる、礼儀正しい、協調性がある、上下関係を重んじる、友達を大切にするなどという傾向が強い。しかもスポーツ系のクラブに所属する学生は、非スポーツ系、いわゆる文化系のクラブに所属する学生よりもさらに高いスコアを報告している」

これはアンケート調査を定量的に分析して、部活、特にスポーツ系の部活に入っている人がどれぐらい高いスコアを示したのかを、「間違いなく undeniably」と言っているぐらいです。「これは間違いないんだ」と外国人が、日本人の部活を捉えているわけです。私たちからみて日本人は部活を大事にしているし、海外の人からみても、部活が日本人の生活にどれだけ食い込んでいるかというのがこういったところがわかるんじゃないかなと思います。

3) なぜ部活動は魅力的で欲望的なのか？

なぜ日本人が部活をこれほど大事にしてきたのかを、考えてみるために「補助線」を引いてみようと思っ

て作ったのがこの図です。学校教育の中にはいろんな教科があります。中塚先生が担当している保健体育だったり、受験で必須の数学とか英語とか社会科とかがありますよね。実は、研究者の間で議論されているキーワードがあって、教科には「周辺性」あるいは「非中核性」があるというものです。これは私がそう思っているんじゃなくて、海外の人たちが言っていることで、日本でも同様の現象があると思います。学校教育の中心になっている教科というのは、国語や数学なんです。なぜ中心に位置づくかということ、受験と結びつくからというのが一つの要因です。

学校カリキュラムを社会的に研究をしている人は、数学の先生や国語の先生は、学校の中で支配的な地位を得るとも言っています。なぜかということ、数学は答えがはっきりしているし受験科目だから生徒は一所懸命勉強する。他方、保健体育はというとたかが遊びです。高橋先生の言葉を借りると休み時間の延長線上と考えられるわけです。なので保健体育は周辺の教科と言われるんです。

では部活動はというと、それよりも周辺の教育課程外の活動です。最近、一般によく知られるようになったことですが、部活動は学校で必須の活動ではないわけです。なので、部活は保健体育よりも学校の周辺に位置づく活動ということになります。

では、そんな部活がなぜ人を魅惑したり引きつけるのかということ、こういうことではないかと思

います。学校の中心に位置づくということは、見方を変えると、作られた、制度化された教室の空間で行われる活動であることを指しています。それが周辺に行けば行くほど、学校の周辺の「リアルな世界」に近づいていくわけです。だから学校の中心に位置づく教科は作られた空間の中での出来事です。保健体育や部活がなぜ子どもたちに人気なのか。ちなみに、小中高の生徒にどの教科が好きですかって聞くと、必ずと言って良いほど体育が一位になります。その理由は、「たかが遊び」と高橋先



生は言っておられた、その通りだと思います。遊びは楽しいからです。部活動の位置づけを考える際に、学校の中心から周辺に追いやられているということをポジティブに捉えると、リアルな生活に一番近い活動なんじゃないかと言えます。

なのでここに書かせていただいた通り、学校教育の中で最も現実的で生活実感に直結する場だからこそ、鮮烈な経験とか欲求とか欲望がさらけ出されるわけですね。

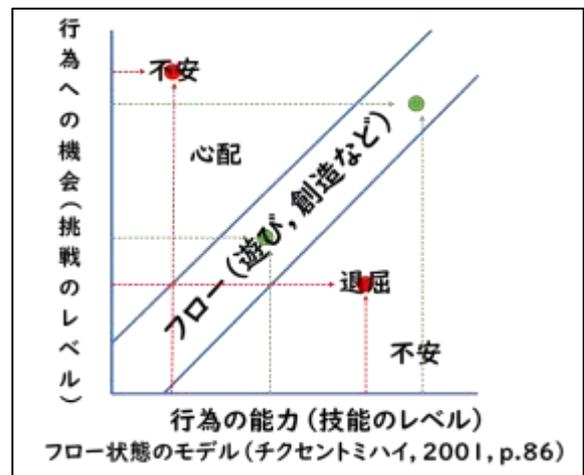
こんなことを言ってる人がいます。スポーツ哲学の研究者なのですが、「子どもたちの学校の思い出も、教科の授業においてではなく、部活動など課外活動において強く確かなものとして形づくられているのではないのか。…芸術やスポーツの強烈な魅力的体験と同質のものを、教科の授業でどう実現するのか」と。ここまで言わしめるぐらい、部活は子どもたちにとって鮮烈な経験となるわけです。教員にとっても欲求とか欲望がさらけ出されます。体罰が起こるのは、非常にリアルな感情がむき出しにされる空間であるがゆえに、だということもできます。それをどうコントロールするのかというのが、次のお話です。

ちなみに、部活ってなんでこんなに魅惑的なのかということ、スポーツを例に、ちょっと見ていただきたいと思います。バスケットボールの試合場面で2分ぐらいの動画です。延長戦で、同点になり、フリースローが与えられる。これで同点になるんですね。（その後、試合終了と共に超ロングゴールが決まる「ブザービーター」で大逆転する映像）

<2分間の映像視聴>

小学生でも絶対これ面白いと思うんですよ。スポーツってなんでこんなに人々を惹きつけるのかというと、この場面を経験してしまうと、もうやめられなくなっちゃうんですよ。これってやっぱり部活動とかスポーツって、どれだけ人々を魅惑するのかがよくわかる場面ですけど、これも実は理論化されています。この図では、縦軸が「行為への機会」で自分が挑戦しようとするレベルです。横軸が「行為の能力」です。皆さん「フロー」という言葉ご存知でしょうか。これがちょうどバランスがとれていると時を忘れるほど夢中になってしまうんです。このように、自分の行為レベルが高く、挑戦のレベルも高いと、このフロー体験が起こる。だからもう無我夢中になってしまう。

でも逆に、自分の能力が高いのに挑戦レベルが低いと退屈になってしまうし、自分の能力が低いのに、挑戦レベルが高すぎると不安になってしまう。たぶんスポーツって、自分の能力と挑戦しようとするレベルが均衡してる時の、没入状態を繰り返していくことによって人々を引きつけていくところがあるんじゃないか。たぶん部活の中でこういう経験を皆さんされているんじゃないかなと思うんですね。これがフロー理論で説明した部活の「楽しさ」です。



4) 部活動で何を学ぶのか?

最後に、部活動で何を学ぶのかという話です。

面白いことしたい。例えばサッカーをしたいという人たちがいるとします。部活で何を学ぶかっていうと、サッカーしたいというだけではサッカーが楽しいという状態には至らないんです。ただこの

間にある、自分がサッカーを楽しみたいと思ったときに、サッカーって楽しいという状態に行き着くプロセスで一体何をするのかということが、部活動で学ぶことなんじゃないかと考えます。

これは部活動学会会長の神谷先生が示されているものですが、部活でやることって練習とか試合だけじゃなくて、組織や集団をどうやって作るのということもあります。その組織や集団が、自分たちでスポーツの場所を作るために社会や条件にどうやって働きかけるか。こういうことをまるっと行っているのが部活なんだよというのを説明されています。まさにその通りだなと思います。ここにリストに掲げていることが、皆さんが部活の中で必ずやっていることです。

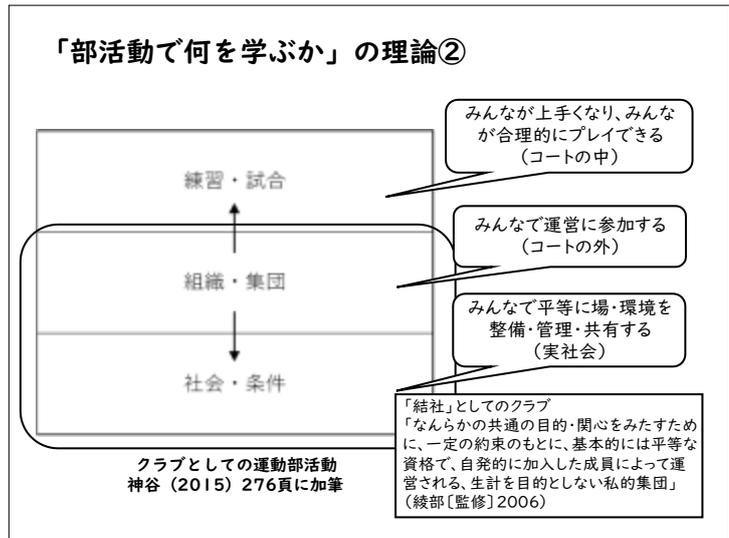
しかし、私のような部活動経験をしてきた者は、練習や試合しかやってないんです。これがたぶん、私が部活動で学んでないんだなって思う理由になるんですけど、附属高校蹴球部で活動された皆さんがどのように組織や集団、環境についての自治をしてきたのかということも、学びの中身として考えていただくと良いかなと思って用意しました。

5) 部活動で何を学んだことはどのように広がっていくのか

最後に、なぜ部活で学んだことが社会で役立つのかということの説明しておきたいと思います。

部活って、先ほど言った通り面白いことを創造する活動なんですね。この面白さというものは、ちょうどフロー状態で均衡が作られている状態です。そこで経験するのが、「生きられる時間」という言葉を使うんですけど、つまらない話を聞いているときって時間がすごく長く感じられるじゃないですか。面白い話ってあっという間に終わりますよね。だから実は、私たちって時計で測れる時間以外の、自分で面白いときに無我夢中になってしまうような時間とか、つまらないときになかなか終わらない時間というような、「生身の時間」というものを持っているのだということです。「生きられる時間」というんですけど、まさにフロー体験ですよ。

こういうのを作ろうとしたときに私たちがやることを整理してみます。まず面白いことをしたいと思ったら、仲間を集めなきゃいけないし、道具を用意しなきゃいけない、場所を確保しなきゃいけない、時間を決めなきゃいけない、ルール作らなきゃいけない。



「部活動で何を学ぶか」の理論②

クラブの立ち上げから大会参加までに必要とされた「自治内容」
(神谷, 2015, 233頁)

①<練習・試合>・・・みんなが上手くなり、みんなが合理的にプレイできる	・ルール・試合会議(学習)	・目標・方針・練習計画の決定
・対戦チーム・メンバーの選定	・出場大会の選定	
・プレイの観察・分析	・選手・ポジションの決定	
②<組織・集団>・・・みんなで参加して運営する	・クラブ・チームの名称を決める	
・クラブ・チームに必要な人を集める(指導者などの専門的な人材を選ぶ)		
・役割分担(代表者・キャプテン、監督、大会申し込み係、審判係、用具係【買い出し、観戦グッズ・旗の制作】、渉外係【外部との交渉】、交通係、ルール・作戦検討係、日程調整係、ビデオ撮影係など)		
③<場・環境>・・・みんなで平等に場・環境を整備・管理・共有する	・練習・試合・ミーティングの日程、時間、場所の決定・確保	
・経費の計上・管理・捻出		・用具の準備・管理・購入
・交通手段などの検討		
・場・環境のシェア・共有(一つの施設を複数で使う場合において、どのようにすればシェア・共有できるのか。施設の空いている時間帯を調べるなど)		

面白いことができ、もっと面白いことがしたいとなっていくと、皆さんにお配りした資料にあるとおり、どんどんどんどんスパイラルになっていくわけです。

仲間を集めるだけじゃなくて、仲間を探す、チームを作る、お金を出し合うとかどんどん広がっていきます。このようにスパイラルしていくと、やろうとすることが大きくなっていくわけですね。5人で遊んでいたのが10人になり、10人で遊んでいたけど他のチームとやってみたくとなる。用意された道具を使っていたけど、自分たちで購入したいとか、もっと広い場所でやりたいというようにやっていると、面白いことがどんどん広がっていく。私たちはこれを繰り返していると、ただ単に自分がするだけじゃなくて、他の人が面白いことをしているのを見たり、それを支えたり、創ったりする。そのために友達や仲間を探したり、募ったりするし、やがて単体のチームがクラブになっていく。学校から地域や社会に広がっていく。

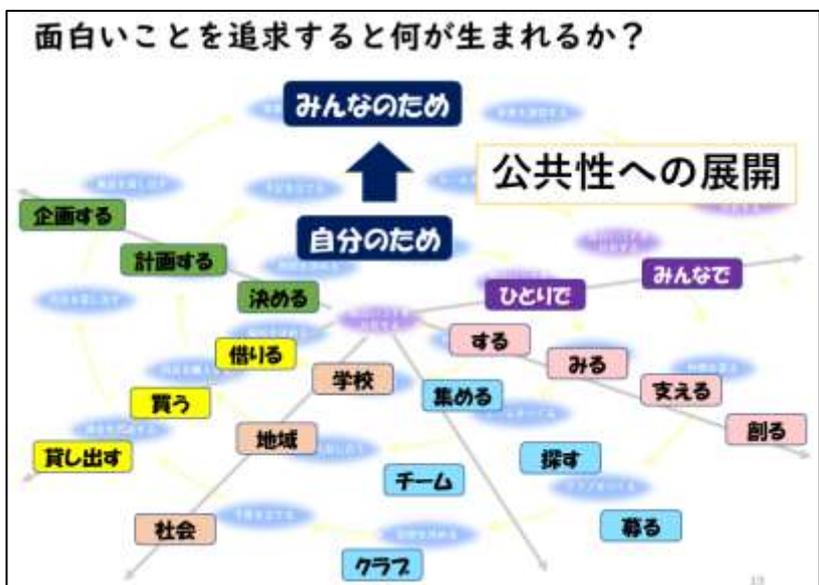
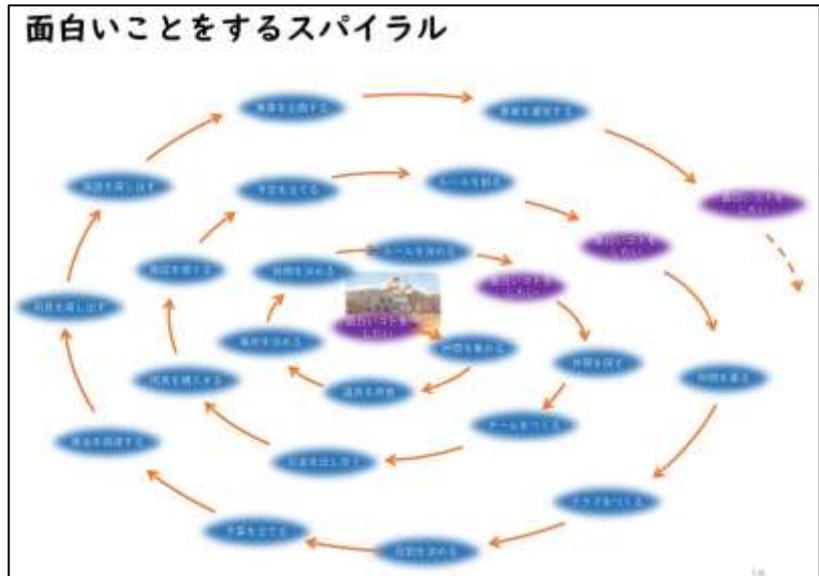
道具を借りるだけでなく、買ったり、貸し出したりする。このようにやっていると、はじめは自分のためだけだった面白い活動が、あるいは面白いことをするために行っていただけの活動が、「みんなのため」になっていく。自分の私利私欲や自分だけの面白さだったものがみんなの面白さになり、ここに「公共性への展開」が生まれてくるんです。

部活動って、まさにこういうことを学ぶ場じゃないかなと思うわけです。だから部活で学んだリーダーシップがどこかの会社で生かされたり、他の人と働くときに誰かのためになったりする。こういうことが、部活動で面白いことをしたいということの延長線上にあるんじゃないかと考えています。

最後に、面白いことは遊びとか余暇という言葉で表されるんですけど、何でそんなに面白いことって人間にとって大事なのかということについて、いくつかの言葉をご紹介します、終わりたいと思います。

先ほど「遊び」という言葉が出てきましたけれども、こんなことを言った人がいるんです。

「文化は遊びの形式の中に成立した。文化は原初から遊ばれるものであった」(ヨハン・ホイジンガ『ホモ・ルーデンス』、1938年)



文化の中に遊びがあると皆さん思いがちかもしれません。けど文化は、実は遊びがあるから生まれてくるんです。衣服は、「寒いから着る」ということだけであつたら、皆さんが着ている服ってそんなにデザインは必要じゃないじゃないですか。でも何かかっこいいとか、かわいいとか、おしゃれというの、服を選ぶという遊びだから。エッセンシャルじゃないものを身にまとうことによって、服の文化が生まれていったりしますよね。このように、遊びとか余暇というものがあるが故に、人間は文化を作ることができている。そのように考えたのが、ホイジンガが『ホモ・ルーデンス』という著書で言ったことです。

日本に目を向けてみても、平安時代に編まれた歌集の中にこんなことが書かれています。

「遊びをせんとや生れけむ 戯れせんとや生れけん 遊ぶ子供の声聞けば わが身さへこそゆるがるれ」（『梁塵秘抄(りょうじんひしょう)』：平安時代に編まれた歌集、主に当時の流行歌（今様）が集められたもの）

これは後白河法皇によって編まれた「梁塵秘抄」で詠まれたものです。遊ぶために生まれてきたんじゃないのかって、もう悟っちゃってるような歌です。遊びって人間にとってすごく大事ななことなんです。

学校の語源ってギリシャ語のスコールという言葉ですけど、拍子抜けするかもしれませんが、実は「暇」という意味です。実は学校は「暇」な場所だったんです。

この暇な場所で学んだりするということに人生の楽しみがあつたわけですね。学校って嫌々行く場所のようになってしまっていますが、そもそも学校という場所は暇を作っていく場所だし、そこで学ぶことがすごく楽しかったから、西洋の人々は人間形成や成長のために「余暇」を大切にしたり、それを充実させるためにわざわざ労働時間を短縮したんです。自己実現のための余暇とか遊びは、個人が個人であるために譲り渡すことのできない最後の砦と言われるぐらいです。

話をまとめると余暇とかフローとか面白いことっていうのを中心にして、それを作っていくっていうのが部活動だし、それらを作っていく活動を自分のために行っていたのが、どんどん広がっていくことによって、誰かのためになり「公共的な性質」を帯びていく。そういう可能性が部活動にはあるんじゃないかなというふうに思うところです。

附属のOBが集まって、サッカー部の活動について振り返られると思いますので、ぜひ自分の自分たちの活動っていうのに意味を持たせるとしたらどんな意味があつたのかなとい材料になればいいかなと思っております。

中塚：朝倉さんありがとうございます。ここにお集まりの蹴球部卒業生の皆さんは、こういうことをあまり考えないまま過ごして来たと思うし、ここでこのような話に触れることを想像していなかったかもしれません。話の前段として、部活動の位置づけであったり、遊び、非日常、それがどのような中身を持っているのか、どのように位置づけられ、社会とどう繋がっているのかを学術的に捉えたいと中身に入りたいと考えました。



注) 第1部のスライドは登壇者が提供。写真は中塚義実が所蔵・提供。

第2部：近現代を中心に

0. 近現代史の前に—サッカーとわたし（中塚義実）

ここからは、皆さんが体験してきた蹴球部の近現代史を振り返りながら、一体どんなことを学んだのか。「学んだ」という言い方は大げさかもしれませんが、それがいまの皆さんにどのように繋がっているのかについて意見交換できればと思います。

今年の2月、同じ桐陰会館で、附属中高蹴球部の100周年のお祝いをすることができました。我々の部は100年前から、あるいはその前から遊びでボールを蹴っていた人たちがいて、ちょうど100年前、学校公認の部活動として位置づけられました。うち最近の38年間を「近現代史」と勝手に言っているのは、私に関わった期間のことです。

本題に入る前に、着任以前の私とサッカーの関わりについて、サッカー界の動きと絡めて押さえておきたいと思います。それは、この部がどのように変わってきたのかにも関係すると思います。

父親・頼彦もサッカーをやっていました。高知市内の中学時代で、高校生だった成田十次郎先生との出会いがきっかけです。皆さんのお手元にある冊子『遊ASOBI』2023年度版には、昨年度の公開シンポジウム「成田十次郎先生を語ろう！」の報告書が載っています。デットマール・クラマーを日本に紹介された方です。あとで見ておいてください。

組織的にサッカーに関わるようになったのは茨木南中サッカー部に入ってからです。今年50年ぶりに同窓会があり、熱血サッカー部の仲間も大勢集まりました。

世界のサッカーでいうと、1974年の西ドイツ大会が中学1年のときです。「ダイヤモンドサッカー」で初めて海外サッカーを見て、緑の芝生でプレーしていることに驚きました。

中学時代は熱血サッカー部でしたが、高校は真逆の民主的運動部でした。練習は主将を中心に部員が進め、試合に出るメンバーも先生ではなく部員が決めます。三島高校サッカー部顧問は成田十次郎先生の教えに感銘を受けたとお聞きしたことがあります。成田先生は東京教育大学サッカー部監督として部員主導の民主的な部活動運営をされ、結果も残し、新聞や雑誌で取り上げられた記事を読まれたそうです。高校時代はそういう中で、熱くサッカーをやっていました。主将として練習を考えリードしていた経験が、いまの仕事につながっているのかもしれませんが。

1979年のワールドユースはマラドーナが大活躍してアルゼンチンが優勝した大会です。高校3年のときです。筑波大学体育専門学群に入学し蹴球部に入ると、ワールドユースの日本代表で同年代の3人のうち2人が推薦入学で来ていました。一人は風間八宏です。「ヤヒロに驚く」。彼のスキルにはホンマに驚かされました。

プロサッカーがなかった当時、筑波大蹴球部は各都道府県の一国一城の主が集まるようなところでした。部員は100人。けど公式戦に先発で出られるのは11人です。私は上のチームと下のチームを行ったり来たりするような選手でした。

100人をどうやってマネジメントしていくかは大きな課題でした。「運動部のあり方に悩む」と書きましたが、ちょうど4年生になるときに大議論しました。当時、部のルールとして「禁煙」というのがありました。アスリートとして禁煙は当然だということで、監督が示したルールです。当時はいま

サッカーとわたし (中塚義実)

1961年生まれ、1970年より大阪

父・頼彦もサッカーで...
土佐中高:成田十次郎
大阪商業大学:上田亮三郎

1974年～ 大阪府茨木市立南中学校 1974年 西ドイツ大会
「茨木南中サッカー部」

1977年～ 大阪府立三島高等学校 1978年 アルゼンチン大会
「三島高校サッカー部」 1979年 ワールドユース

1980年～ 筑波大学体育専門学群 1980年 ヤヒロに驚く
「筑波大学 AB⇔CD」 運動部のあり方に悩む

1984年～ 筑波大学大学院修士課程 日本代表は低迷
(スポーツ社会学) 日本リーグ1984「格闘技宣言」
「ジョイフル本田」 1985年 W杯出場を逃す

1987年～ 筑波大学附属高等学校 サッカーのプロ化を修士論文で
「東京教員クラブ」 1991年2月 記者発表
日本プロサッカーリーグ誕生(11月)

よりタバコを吸う人が多く、ルールとして掲げてはいたけどこっそり吸っている人は結構いたんです。僕らの代になるときに、このルールをどうするかという議論を、まず同級生ではじめました。決まりだからダメという者、運動生理学的に問題があるからダメという者、タバコを吸うことで落ち着く人にとってはいいじゃないかという者。いろいろいます。私は「守れもせんルールを掲げてもしゃあない。それよりも“よい選手、よいチーム、よい指導者”という部のモットーに立ち返って“よい”とはどういうことかを議論すべき」という立場でした。

同級生でさんざん話をし、下級生を巻き込んで全体ミーティングを何度も繰り返し、最終的には「一度全員退部する。11月某日のミーティングに、禁煙というルールを守れるやつが再び集まる」ことになりました。サッカーの練習や試合とは関係ありませんが、自分たちの部をどうしていくかということ自分たちで本気で議論した場だったと思います。大学時代の忘れられない経験です。

大学院でスポーツ社会学を専攻し、スポーツの多様なあり方、チームとクラブ、諸外国のスポーツ環境について学びます。修士論文は「日本サッカーのプロ化過程に働く社会的背景の研究」で、奥寺康彦さんと木村和司さんがプロ選手として公認されたあたりを取り上げたものです。日本サッカーは世界の舞台からはるか遠く、アマチュアスポーツからプロスポーツによりやく一歩踏み出したところで、Jリーグ誕生はまだ先で、学校以外のクラブスポーツが日の目をみるのはまだまだ先の話です。

修士論文を書いた翌年、1987年に着任します。私が赴任したのはそのような頃でした。これが「近現代史」前段です。

1. 着任から DUO リーグ創設まで (1987~95)

ここからは写真をみながら「近現代史」を追っていきたいと思います。

着任初年度の夏合宿の写真です。練習は月水木土、日曜は練習試合。都心部では珍しくフルサイズのピッチが取れるので、毎週いろんな相手と練習試合をしていました。中体連や高体連の会場になることも多く、関東リーグに上がった東京教員の試合会場にもなりました。私自身、現役としてプレーしていたころです。毎週木曜日は部活後に学習院まで自転車で移動し、ナイターで学習院大と東京教員の練習試合に出て、そのままトンカツ屋で飲み食いして帰るという生活です。この頃の部活は、私にとっては自分自身のトレーニングでもありました。



- ・月・水・木・土で練習 + 日曜は練習試合
- ・東京教員は関東リーグ(毎週木曜日のナイターで学習院で練習)
- ・筑波大附は高体連の会場校&関東リーグのホームゲーム
- ・伊藤良徳先生あつてのサッカー部!
(化学講義室はクラブハウス? / 女子マネージャーのおかげ)
- ・サッカー界は... 1986年度より「プロ選手」公認!
ソウル五輪予選で中国にホームで敗戦!



化学の伊藤良徳先生が裏方のところをていねいにやってくださいました。化学講義室はサッカー一部のクラブハウス。女子マネージャーあつてのサッカー部です。サッカー界では、先ほど言ったようにプロ選手は公認されたけど、着任した年の10月のソウルオリンピック予選で中国にホームで負けて出場権を失います。

そんなころですが、サッカー部は徐々に力をつけてきたんです。ACミランが前線からのプレッシングをやり出す前に、うちは「アタッキングディフェンス」という言い方でチャレンジし、力をつけてきました。神奈川の湘南高校が全国出場したときも、定期戦ではほぼ互角のゲームができました。負けましたけど…。

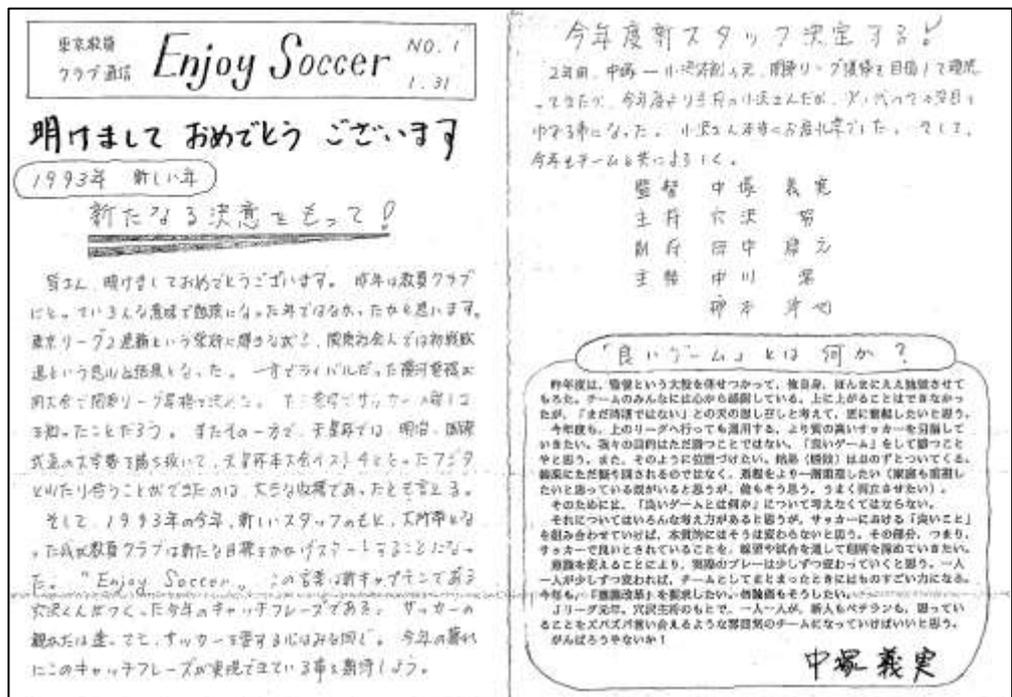
この頃、「3年の夏」にある高校選手権予選にチャレンジする人のことを3年の夏まで「残る」という言い方をしていました。6月第1土日にある学習院との総合定期戦は、全校生徒・卒業生・保護者が見守る中で部ごとに試合をするビッグイベントです。ほとんどすべての部が、陰戦を最後に「引退」という言い方でやめるんです。甲子園の予選がある野球部と、夏がシーズンの水泳部は3年の夏までやっていましたが、サッカー部はそれぞれの判断に任せていました。

冬の高校選手権予選は、出場チームの多い東京では夏からはじまります。そこまで続けるか、それとも他の部と同じように院戦でやめるかは、昔も今も大きな選択です。DUOリーグができて以降は「3年の夏までやるのは当たり前」としていますが、このころは各学年2人いるかどうかといった状況でした。コロナ後のいまも同じ状況に戻ってしまい、いまでは学習院にほとんど勝てなくなりましたが、このころは「学習院には勝てる」ぐらいの印象でした。

先ほど言った通り、私自身も現役でプレーしていました。「働き方改革」という言葉もありません。学校のことはすべてやる、高体連の大会も、東京教員の活動も充実。昔の資料をみていたら、こんなのが出てきました。東京教員で監督兼選手をやっていたころの「東京教員クラブ通信」です。1993年1月の、監督兼選手となって2年目のものです。1993年のスタッフは監督・中塚、主将・穴沢です。穴沢さんはJリーグ審判もされ、いまは都立高校の校長先生です。

通信には、監督メッセージとして「良いゲームとは何か？」を書いていきます。「我々の目的はただ勝つことではない。良いゲームをして勝つことやと思う」と。このフレーズは成田十次郎先生の本からいただいたものです。そのために「良いゲームとは何か」について考えることや、「サッカーにおける良いことを組み合わせ」ること

と、普段の「練習や試合を通して理解を深めていきたい。意識を変えることにより、実際のプレーは少しずつ変わっていくと思う。一人ひとりが少しずつ変われば、チームとしてまとまったときにはも



のすごい力になる」と述べ、教員チームの練習も、高校生がするような基礎練習からしっかりやった記憶があります。これがJリーグが始まる1993年の年頭あいさつでした。

3月の卒業式の写真には、初担任の101回生サッカー部員にまぎれて、中塚にだっこされる赤ん坊がいます。のちに119回生となる長男です。

1993年5月にJリーグが開幕しました。プロサッカーがはじまったというだけでなく、学校・企業に依存していた日本のスポーツ界に、地域に根差したクラブ育成という考えを持ち込んだJリーグは画期的でした。「Jリーグ100年構想」ですね。

102回生の卒業アルバムに3名の女子部員が写っています。村田女子商業高校（現広尾学園小石川中学・高校）との合同練習をしながら3年間過ごしました。卒業とともに女子部員不在となりますが、111回生で再興します。

1993年と1994年の夏合宿の写真です。場所は「高萩大心苑」です。

5泊6日の夏合宿はハードなものでした。合宿最終日は1年生 vs 2年生の試合とマラソン大会で締めくくりますが、104回生のある部員が「坊主をかけよう」と言ってはじまったのが「坊主戦」です。すでに坊主アタマだった、○で囲ったこの部員が言い出しっぺです。坊主戦は学年対抗として始まりましたが、のちに全員がくじを引き、負けた二人がチーム編成して坊主をかけて戦うスタイルになります。こんなアホなことを本気で遊べる集団でした。いまではハラスメントになりそうですね。

1993年、Jリーグが始まったときの3年生は103回生です。○で囲った2人の3年生が、真っ黒い顔で夏合宿に参加しています。今日はその2人だけでなく103回生が大勢来ているので、あとでコメントをもらいます。

夏合宿後の高校選手権予選は第2地区大会の決勝まで進みます。連戦でしたので、大会運営後に毎日、各校の先生方でご苦労さん会をやってました。「今年の附属はいいチームだね。明日の決勝も勝てるでしょう。負けたら中塚さんが坊主だね」という話になり、負けてしまった私が人生初の坊主頭になりました。テレビの影響か、そのころ坊主頭がはやっていたようです。唯一の単著『少年のためのサッカー入門』もこのころです。当時の部員がモデルとして登場します。

この頃のサッカー部の練習日誌があります。1993年10月28日の日誌担当は寄田浩平さん。「まず、日本ワールドカップ出場ならず」と大きく書かれています。いわゆる「ドーハの悲劇」ですね。

この頃の思い出話と、部活動で学んだことがいまにどのようにつながっているのかを話してもらおうと思います。

まず寄田浩平さん。サッカー小僧で「宇宙少年」だった寄田さんは、国内外の研究者とともに宇宙物理学の研究をされています。研究室で若者と接する機会もある方です。



103 回生のコメント

寄田:103回の寄田と申します。今日は同期が5人も来ていまして、主将も来ているので、あとで補足をしてもらいたいと思います。

先ほどから話が出ているように、中塚先生はバリバリの現役のときでした。僕はサッカーの世界がそんなに広くなかったせいか、中塚先生ぐらいサッカーが上手い人が僕のまわりにはいませんでした。あんなに走れてこんなにうまい人が世の中にいるんだと、衝撃的でした。

ただ非常に厳しかったです。いま思うとあまり褒められことはなかった気がしますが、主将も非常に厳しい人で「小なかつ」って僕らは呼んでいました。ヒラ部員は二人によって非常に鍛えられた代だったと思います。

その甲斐あってか、3年生の春の大会では地区大会を勝ち抜き都大会に出ることができました。勝ち負けの悔しさで涙を流すということを本気でできた、仲間たちと一緒にやってきたのは、本当に大事な経験だったと思います。

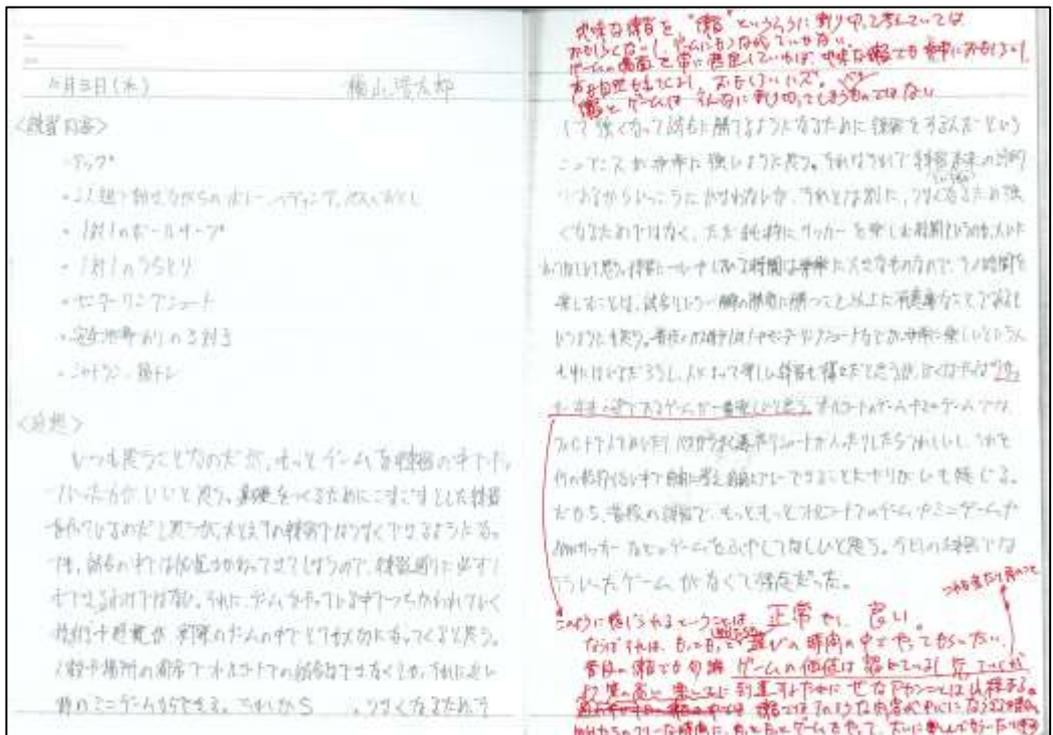
僕は夏まで残りましたが、個人的には最後までやり抜く—その定義はいろいろあると思いますが、最後までやりたかっただけなんです。受験で皆さんすごくがんばる高校ですけど、僕はあまり勉強と両立できたものじゃありませんが、最後まで部活をがんばった。その結果、浪人することになるわけですけど、それについてはまったく後悔してません。

大学に入ってやり抜いたのが物理学の勉強です。もうかれこれ30年たちました。ここまで来ると、やり抜くことは一体何なのかということをや一度、高校時代の自分を重ねながら考えることもあります。

中塚先生の言葉とか高校時代の部活で学んだこととしては、それぞれの人生とかそれぞれの環境によってピックアップの仕方が違うと思うんです。私は、やり抜くこととか厳しいところを選んでいって生活していくことを学びましたけど、ある意味ワイルドカードみたいなもので、おそらく皆さんたちが持っているもの、経験として生かしているものは違うのだと思います。ただ僕が本当に大事にしてるのは、そういったもの、カードを1枚もらったということ、何か悩んだときにそのカードをぱっと見てみる、そういうものをもらったんじゃないかと思っています。

研究者をやっていると、研究と部活動が結構似ていることを感じます。大学生にとっての研究ってある意味、半分興味、面白さでやっていて、それを職業にするわけでもないみたいなどころがあります。なので今回のシンポジウムを通して、そういったところをいろいろ共有しながら学びを深めていけたらと思っています。

中塚:ありがとうございます。103回生はたくさん来ているし主将もいるんだけど、ちょっとこれを見てほしいです。10月13日の練習日誌。横山浩太郎さんが書かれています。批判めいた内容です。「いつも思うことなのだが、もっとゲームを練習の中に入れていった方がいいと思う。基礎を作るためにこまごました練習をやっているのだと思うが…」という書き出しで、不平不満がいろいろ述べられています。



中塚: それに対して私もまめに、「地味な練習を“練習”というふうに割り切って考えていたらおもしろくないしゲームにもつながっていかない。ゲームの場면을常に想定していれば、地味な練習でも非常におもしろいし、声も自然に出てくるしおもしろいはず」と赤字で書いています。こういうやり取りを練習日誌の中でしているけど、読んだことないでしょう。みんなで回覧しているノートだから、日誌を書いた人はたぶんこれを読まないですね。

横山さん、せっかくなので、ちょっとコメントをもらいたいんですけど。

横山: 103回の横山です。そうですね、全く記憶にございません(笑)。ただ、当時はこういうスタンスで取り組んでいたと思います。私はどちらかというとちょっとやらされている感じで、不平もあって、そういったところを出していました。

先ほどからいろいろお話を伺って、あまり主体的に取り組めていなかったというのは、反省ではないですけども、あります。50年近く生きてきて、やっぱりいろんな物事に対してコツコツと、ひとよりも努力して取り組むことは苦ではないんですけど、このときは苦だったので。体が一番切れていて、いろいろ吸収できたときにそういうふうに取り組めなかったのは、反省ではないんですけど、いま思うとそうだったなっていうのを思います。

中塚: 真ん中辺りに、「サッカー本来の姿であるゲームが一番楽しいと思う」とあります。それに対する私のコメントは、「このように感じられるということは、正常やしよ。ならばそれは、もっともっと自分たちの遊びの時間の中でやってもらいたい」。いまでもずっと言ってるんですけど、こんなやり取りをしていました。

103回生の皆さんからほかにどうでしょうか。とくに「学んだこと」について、いかがですか。

池田: 103回の池田と申します。キャプテンをやっていました。学んだことといえば、やっぱり仲間と一緒にやるということ。大人になってからなかなか感じる事のない、一所懸命やるとか、青春を熱く過ごすとか、そういう部分で気持ちをかけられたのはよい経験だったと思います。それぞれ熱量は違って、横山ともよく喧嘩もしましたけど、そういうことができる仲間と一緒にやれたのはまさに青春時代ですね。非常に楽しかった思い出として捉えています。

嶋田: 私は一つ明確に学ぶことがありまして。先生にちょっとお聞きしたいんですけど、歴代で私より足が速かった人はいますか?(笑)

中塚: そうやなあ、嶋田さんは3本の指には入ると思いますよ。

嶋田: 私はサッカーはそんなにうまくはないかもしれないんですけど、足が速くてですね、運動靴で陸上部の大会に出て100mが11秒ゼロだったのが公式記録に残っています。そのときに中塚先生に、「お前、足しかないから、速さだけ鍛えろ」って言われたのをすごく覚えてます。いま会社の代表をやってますけど、自分の得意なことだけ鍛えたらものすごくビジネスになったりしています。全部70点とか65点を取るよりも、1つだけ130点ぐらい取って、それを突き詰めていく。そこに注力することがいかに大事かということを感じています。会社で結果を出すためには、得意なことだけ伸ばして点を取るというのも一つの方法だと思ってます。もっともっと鍛えられたのかなって思ってますけど、それは社会人になって一生懸命鍛えています。

あともう一つは、いまの若い人たちをみていいなと思うのは、私のころはちょっと悪いやつがかっこいいみたいな時代だったんですけど、いまスポーツ選手もバカまじめな奴がかっこいい時代なんですよ。大谷選手やイチロー選手がそうです。言い訳かもしれないんですけど、ああいう真面目な人がかっこいいっていう時代だったら、僕はもっと伸びたんだと思ってます(会場笑)。

中塚:木田さんはいまドクターとして、母校の学校医をされています。

木田:103回の木田と申します。私は実は高2の夏に、1年早く、医者になりたいという思いが強くなりました。「スーパー内部」で小学校からずっと来たということもあって、自分で何かを決めるということがなかったところ、たぶん人生で初めて自分で選択をしました。それが「部活をやめる」ということでした。サッカー部はもちろん好きでサッカーもやりたかったんですが、1年早くやめました。それには全く後悔はないんですが、それがモチベーションになって医師になり、好きな心臓の研究と臨床をやりながらここまで来ました。いろんなご縁があり、去年から附属高校の学校医をさせていただき、そういう意味で恩返しがいまできてるんじゃないかなと思います。

あとは、やめた人間を受け入れていただいているということもありがたいですね。はじめ中塚先生に挨拶に行くときはどうしようかと思ってドキドキして行っただけですけど、温かく迎えてくださいました。この前、日本代表のサッカーの試合を中塚先生と2人で見に行くことをさせていただいて、昔は考えられなかったんですが、本当にいい経験になりました。こういった場に参加できていろんな話を聞けるのもまたいいなと思います。

ありがとうございます。

中塚:卒業後も103回生と飲む機会がけっこうあったんですけど、木田さんは最初から受け入れてもらっていたわけじゃないよね(笑)。途中で退部した人を受け入れられなかった同級生が結構いたんじゃないかなと。そんな記憶があります。去年あたり和解できたんですかね(笑)

こんなペースでやっていると現在にたどり着かないので、ちょっとペースアップしていきます。

2. チームからクラブへ手探りの挑戦 (1996~2008)

◆1996 DUO リーグ創設一大会の位置づけ等でさまざまな議論 (105~107回)

「アマチュアに引退なし」というお題で書いた文書が出てきました。この言葉も、「迷ったらやれ」と同じくらいいろんなところで言っています。「高校の部活動を指導しているといろんなところに不条理を感じるが、その最たるものが、“最後の大会”が終わった後に迎える“引退”という仕組みである」。アマチュアに引退はありません。

右の段落へ行くと「こういった観点から、私の指導する高校のサッカー部では、“引退”という言葉は決して使わせない。

代わりの言葉にいいのはないかと思っていたら、この間、木村和司がいいことを言ってくれた。彼は引退会見で「卒業します」と言ったんですね。

こういうことを含め、アタマの中にいろいろあった中の一つがこれなんです。負ければ終わりのノックアウト方式の大会しかない高校の環境は不健全だ。高橋さんの話にも

アマチュアに引退なし

高校の部活動を指導しているといろんなところに不条理を感じるが、その最たるものは、「最後の大会」が終わった後に迎える、いわゆる「引退」という仕組みである。

トーナメントの大会を中心に回っている学校スポーツ。大会に負けた時点で「引退」し、「代替わり」して、自分は「OB」になるというサイクルを、学校の世界では繰り返してきた。「最後の大会」までやる奴はまだいい。受験勉強だかなんだか知らんが、どんどん「引退」の時期が早まり、実質的に最終学年ではほとんどサッカーをしていないというのが多くの学校運動部の現状である。

アマチュアに引退はない。引退とは、プロ選手が第一線の活動の舞台から退き、アマチュアとしてプレーを楽しむ世界に身を投ずる際に使われる言葉である。アマチュアのくせに「引退」するとは、プレーを楽しむのをやめるといことだろうか。全く考えられない。

こういった観点から、私の指導する高校のサッカー部では、「引退」という言葉は決して使わせない。代わりの言葉にいいのはないかと思っていたら、この間、木村和司がいいことを言ってくれた。「卒業します」と。

かくいう私も34歳。中・高・大と学校運動部でお世話になった後もサッカーの場に恵まれ、ジョイフル本田(筑波大の大学院生中心のチームでなかなか強かった)や東京教員クラブでバリバリにやってこれたのは幸せの一語に尽きる。まだまだやれる気持ちはあるのだが、自分自身や自分を取り巻く環境は年々変化し続け、そろそろサッカーとのそういうつきあい方からは「卒業」しようかなと考えている。あくまでも「卒業」であり、次の舞台への旅立ちである。その舞台の一つがお達者クラブ。引いて退くのではなく、「わしももっともっとサッカーがうまくなりたい」と思う今日この頃なのである。

中塚 義実

あった「グッドルーザー」は、負けても次がある環境の中で育まれるのだと。

そして「ユースサッカーにリーグ戦を」ということになります。

ここから我々の部は次の段階に入っていきます。DUO リーグのある部活。そして引退なし。3年の夏まで「残る」んじゃないくて、その前にやめる人が「やめる」です。

理念を掲げました。「歯磨き感覚」とか「引退なし」「補欠ゼロ」というのは、JFA（日本サッカー協会）の取り組みにアンテナを張ってる人ならおわかりだろうと思いますが、グラスルーツのプロジェクトで掲げられるスローガンです。実はグラスルーツの担当者の方々と話をする中で「使っていいですか」と言われて、「どうぞどうぞ」と。DUO リーグの理念のほうが先にあったんです。

これは文化としてのサッカーのあり方で、当たり前のことです。ぶれない“理念”を掲げながら“魂”を受け継ぎながらずっとやっていくのだということです。

1996年前期が第1回 DUO リーグです。理念を掲げ、近隣の高校やクラブユースの指導者に話をし、賛同してくれた創設6クラブでスタートしました。今年100周年をともに迎えた都立小石川、そして都立向丘、筑波大附、京華、昭和一、三菱養和。高体連だけでなくクラブユース連盟も一緒です。

各学校と高校サッカーのカレンダーを見て、4月から7月の間に9節ぐらいは取れる、これなら10チームの総当たりができるなど考えました。「筑波大附(2)」というのは、筑波大附属から2チーム出るということです。103回生や104回生も本日来ていますが、彼らのころになかった仕組みが、105回生が3年になるときにできました。

このころは大人たちもよく飲みに行って、どうすればおもしろくなるかを Face to Face であだこいだ言い合っていました。「DUO リーグ」という名前はそういうところから生まれました。前期をやってみて「これおもしろいな、後期もやろう」ということになり、学習院、豊南、文京区中学生選抜が加わります。中3も秋以降、やっぱり「引退」しているわけです。中学の指導者と話をし、その子たちを高校生のリーグに入れてあげました。また、筑波大学附属と京華はこのころ毎週木曜日に合同練習をしていたので、Bチームの連合軍をつく

DUOリーグの理念

—文化としてのサッカーのあり方—

1. 「歯磨き感覚」「引退なし」のスポーツライフ
サッカーの生活化
2. 「補欠ゼロ」のゆたかなクラブ育成
チームからクラブへ
3. 強いチームとたくましい個の育成
レベルアップ
4. サッカーをささえる人材の育成
自主運営と受益者負担

1996年度前期(第1回)

DUOリーグ開幕

創設6クラブ: 都小石川(2)、都向丘、筑波大附(2)、京華、昭和一(3)、三菱養和

- ・10チーム、1リーグ制。4~7月の週末にゲーム
- ・1節5試合。1日グラウンド確保できれば1節できる。9節あればできる(夏休み前に充分可能)
- ・昭和一は均等3チーム。筑波大附は1~2年と3年の2チーム。高体連の大会には「代表チーム」を編成

この構想を面白がる、遊び心ある大人たちが、「Face to Face」であだこ
優勝...京華高校(初)だ言いながら作り上げた。

1996年度後期(第2回)

学習院、豊南、文京区中学生選抜が加盟→9クラブ

- ・1部は各クラブの代表チーム、2部は代表外
(現在はレベル別に1・2部制)
- ・文京区中学生選抜が後期のみ参加(現在も)
- ・筑波大附と京華の2軍が連合軍で参加
- ・特別枠選手(19歳以上)は3名まで可
- ・大会参加費を、1チームにつき15,000円徴収(いまは1チーム20,000円)

優勝...三菱養和SC(初)

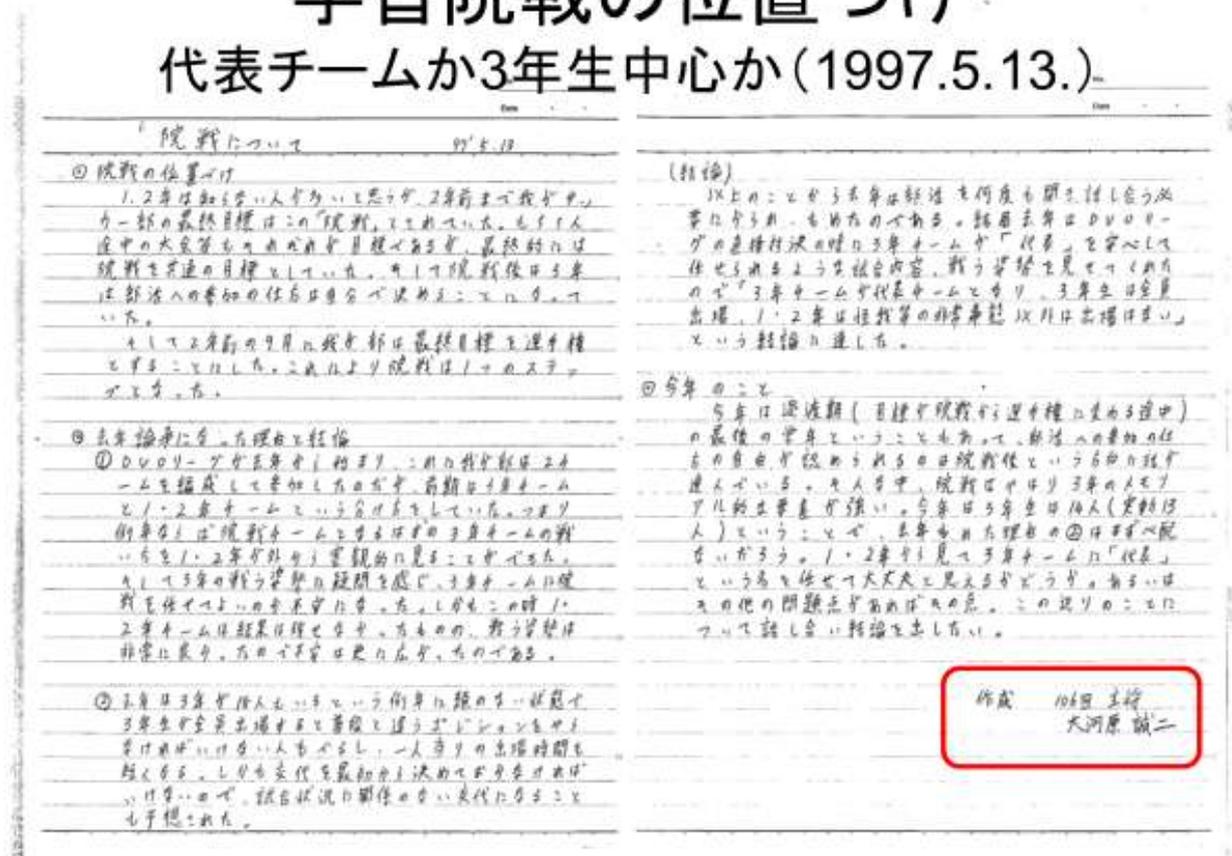
よい活動は自然と広がる。しかし大事なのは「理念」を共有すること。
「小さく立ち上げ、大きく育てる」
いかに続け、広げていくかを考え、実行した

って参加します。さらに、1996年のアトランタ五輪からオーバーエイジが3名まで出られるようになったのを「これ使えるな」ということで採用し、DUOリーグでもオーバーエイジをありにしました。そのおかげで私も時々試合に出られるようになりました。

持続可能な活動にするためには、ささえる仕事を正當に評価し、ペイすることが必要です。そのために参加費を1チームにつき15,000円徴収することにしました。これについては当時の部員が嘔みついてきました。1名だけですが(笑)。ミーティングで時間をとって議論しました。「先生、高体連の大会はただなのに、なんでDUOリーグはお金がかかるんですか」という質問がありましたが、これは間違いです。高体連は学校からお金が出ているんです。「前期がただだったのに、後期になんでお金がいるんですか。どこにお金を使うんですか」とについては、全部説明しました。その部員は理解してくれましたが、納得はしません。彼らが最後に納得したのは、だいたい1チーム15人ぐらいです。チームで15,000円ということは1人1000円です。「お前ら1000円で7試合も楽しめるんやぞ。Jリーグの試合を見に行ったらなんぼや。映画見に行ったらいくらかかる? するスポーツとしてのサッカーって安いやろ」と言ったら、その部員も納得し、彼らの小遣いから徴収しました。

今日はその部員は来ていませんが、同級生が来ているので、この前後のことをコメントしてもらいたいと思いますが、その前にもう少し。

学習院戦の位置づけ 代表チームか3年生中心か(1997.5.13.)



DUOリーグは筑波大附から2チーム出ますが、高体連の大会は2チームの連合軍が「ナショナルチーム」として出ます。一方で、3年生の最後の試合とされていた学習院との定期戦にどんなチームで出るのかが大きなテーマになりました。「夏までやるのは当たり前で院戦は通過点」なので「ナショナルチームで臨むべきだ」。けど実際は夏の大会前にやめる者もいて「3年生のメモリアルチーム」という考えも出てきます。こんな議論をするようになったのがこのころです。

この文書を書いた106回主将の大河原さんと同級生の西片さんがいますので、このころのことについてのコメントをお願いします。大河原さんはコーチとしても、何代かにわたって見てくれているのでそのあたり、部活動で学んだことについてもお願いします。

106 回生のコメント—DUO リーグが始まったころ

大河原:106 回の大河原です。DUO リーグが始まった初年度は、3 年生で A チーム、1, 2 年生で B チームの 2 チームで出ていました。練習試合や大会に出るときは、代表チームとして 1・2 年生が何人か混ざって 3 年生主体の A チームの試合があって、その後で B 戦があるという構成でしたけど、DUO リーグで A と B を学年で分けたチームでやることになって、3 年生のゲームを 1・2 年生がみる機会ができて、院戦にどうチームで出るかという議論が活発化した背景がありました。

環境面で何がこの頃変わったかと、単純に試合の数が増えて、ほぼ毎週グラウンドでサッカーしているように変わったというもあります。高校生のときはあまり考えられてなかったんですけど、その後コーチとしてかわり、その後もずっと部活に関わらせてもらって考えると、DUO リーグが始まったことによって、プレーする以外の、たとえば審判をすることだったり、運営に関わることだったり教える側だったり、いろんな側面のところを経験する機会が増えたのかなと私は思います。

西片さんよろしく。

西片:西片です。喋るつもりがないままここに来たので振られてびっくりしていますが、DUO リーグが始まって、単純に私は嬉しかったです。その頃の私は、いわゆる代表チームの補欠にいたり、代表チームに出られないときが多々あり、試合の日に学校に来て試合に出られるかな、どうかなというのがあったのですが、DUO リーグが始まって必ず試合に出るというところで、より練習に励むことができたというのがあります。

大河原さんは高校のコーチとしてずっと関わっていくんですが、私も卒業して理学療法士になり、「DUO リーグトレーナー」を拝命して運営にも関わらせていただきました。部活からというよりも、DUO リーグから学んだことはすごく大きいなと思っております。

中塚:ありがとうございます。このころはいろんなことで話し合いの時間をとりました。時間があれば詳しく取り上げたいのですが、たとえば退部者をめぐる議論。ある部員が、自分はサッカーが上手くない。練習をやっているけど皆の足を引っ張るだけだからやめまうと言ってきたときに、練習をやめて全体ミーティングをするなど、いろいろありました。一人ひとりを大事にするという大げさですが、ここはこだわっていましたね。それが部の文化なのだと思います。

スライドは、JFA 機関誌『JFA news』の連載「ユース年代のサッカーはいま」の最終回からの引用です。1997年6月号(156号)から1998年3月号(165号)まで計8回にわたって連載し、DUOリーグからはじまるリーグ構想や筑附高蹴球部の取り組みなどを紹介しました。いまバレーボールやバスケットボールでもユースリーグをやろうとしていますけど、少なくとも私は、サッカーだけでこれを完結させるとは全く思っており、他のスポーツに広げていく構想を持っていました。たとえばスポーツ好きのB君は、前期はバスケットボール、後期はサッカーのリーグに関わるような環境ができればいいと考えていました。

「毎日、年中やっているから、障害の発生率が高まるし、施設が足りなくなる」というようなことをいろんなところで言っていましたけど、なかなか定着しません。いまのDUOリーグもそうですが、試合数を確保すること、マニュアルやルールだけが伝わり、「理念」や「魂」がなかなか広がっていかないもどかしさがあります。

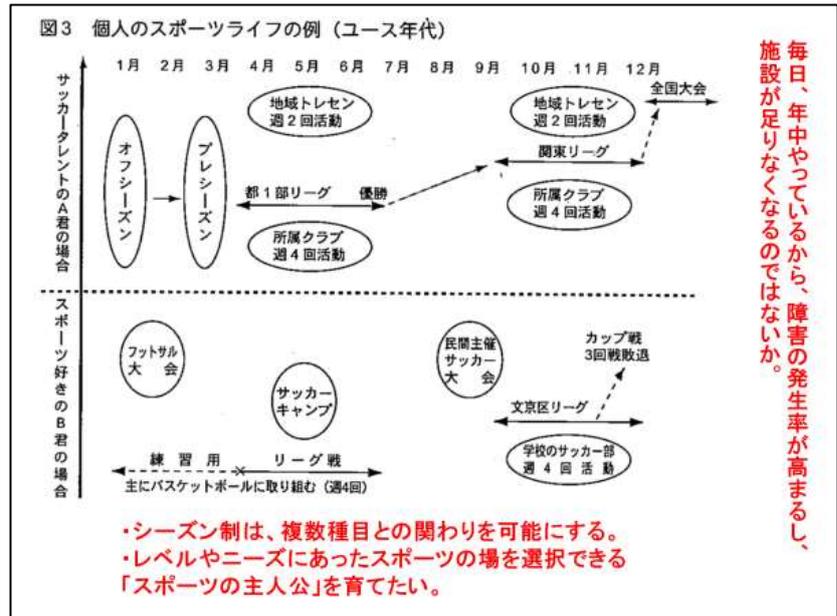
ということで、ここまで「チームからクラブへ」の中でDUOリーグ創設期のお話をしました。

- ◆1998 校内フットサル大会初開催ー「引退なし」をめぐる葛藤・合宿地変更等 (108~110回)
- ◆2000 女子部創設・3部門確立ー「クラブ」として成長 (111~113回)
- ◆2008 手探りでクラブを活性化ー117回サッカー部の進化 (114~117回)

「校内フットサル大会」「女子部創設・3部門確立」。このころが手探りでいろいろチャレンジしていた時代です。

106回生がいた頃の写真です。下が105回生の写真ですね。

フットサル部誕生の契機となった「サッカー部員の皆様へ」という文書があります。そもそもニーズの違いでした。107回生、先ほどの二人の1学年下のサッカー部員・鈴木君は、サッカーは好きだけど競技志向で続けるのはちょっとしんどい。楽しみ志向でやりたいんだと。先ほどの横山さんの感覚に近いものかもしれません。



サッカー部員の皆様へ ～元サッカー部員・鈴木からの提案～
1998.1.23

「クラブ活動」に対する考え方は色々あります。しかし現状として、日本の学校運動部に於いては、勝利至上主義、成り何に於いてもチーム優先といった考え方が先に立ち、「色々」なニーズに合わせた活動が行われていません。皆さんには西遊が異職と映ったかもしれませんが、僕自身の部活動に対する考え方は、僕が退部する時にお願したと思います。

僕が退部する際、サッカー部でも部員資格を再検討し、基本的には従来のままで順位づけをするという事で決着しました(これは恐らく本校の他の運動部に比べるとかなり先駆的と思われまふ)が、まだ様々なニーズの者を柔軟に受け入れる意識に欠けるとは言い難いところ。それを踏まえ、自分の考える運動部の在り方と現状とを比較、疑問を感じて昨年フットサル同好会を設立しようと試みましたが、私がかしかながこれは成功しませんでした。現在に至るまでの経緯の経緯は以下の通りです。

6月	生徒部に活動申請を提出、公開期間に入るが、入会希望者が集まらない。
7月	主幹・責任者会議で設立認可、準正式活動を開始可能に。
9-12月	準正式活動開始。しかし必ずしも人数が集まらず、実行費などの関係で思う様に活動が出来ない。
1月	教員会議にて、活動の目的と内容が認められず、申請却下。

僕の計画最大の失敗は、人数不足です。そして教員会議で申請が却下された後、その原因を考え、部(同好会)としての外枠を固めすぎた点に大きな問題があったと分析しました。その事から、果たしてニーズに合わせて小さなチームを分立する事は正しいのかどうかという問題に行き当たり、フットサル同好会設立の理念は行き詰まっていました。

新たな形でフットサルの基本理念を生かせる「クラブ」というものを作るべく、サッカー部の皆さんにご相談にありました。皆さんは今の体制で十分かも知れませんが、理解し難いという方もあるかとは思いますが、**「ぜひ変更をさせて頂きたい」と**思います。

フットサルの基本理念は、大会への登録制度に顕著に表れています。それによると、大会への出場を希望するチームは、大会毎に本協会の指定する登録用紙に必要事項を記入した上で、該当大会規定する地域/都道府県協会若**「ニーズの違いを受け入れてほしい」**

フットサル部門設立の申し出(1998.1.23.)

フットサル登録制度は、該当大会の期間中のみ效力を発揮するものであり、本協会の定める通常の個別毎の登録と異なり、年間を通じてチーム登録/個人登録を行うものではないと有ります。つまり、どの様な人間の集まりのチームでも、平穏ささえすれば大会に参加でき、その登録は継続するものではないのです。この規約の趣旨は、**「フットサルを履でも名称に違ふ、その喜びを分かち合うというもので、それがフットサルの基本理念そのものなのです。」**

前置きが長くなりましたが、僕の提案は、「誰でも気軽に楽しめる」という理念をサッカー部に取り入れて頂きたい、そして我々も仲間に入れて頂きたい、という事です。それを可能にする「クラブ」の例としては、次の様なものが考えられます。当方は「サッカークラブ」という大きな枠組みの中に、サッカー部門とフットサル部門を作る。サッカー部門は、主に大会で勝つ事を最終目標に置き、それを目指す者が従来の通りの練習・トレーニングなどを行う。一方フットサル部門は、とにかくサッカー(フットサル)をプレイする事を楽しみ、できるだけ拘束を少なくする。勿論、2部門の間の移行は自由とする。これはあくまで例です。決してこの通りにするという訳ではありません。僕が言いたいのは、「学校の代表選手が集まり」という学校運動部の位置づけを変え、**「サッカー部員資格の第1番目(サッカーが大好きである)」という事を尊重、それに該当する者に対してもっと大きな門戸を開いて頂きたい、**という事です。仮にその方法が先の例ならば、入部した者は目的に合わせ、2つの部門の好きな方(両方も可能)で活動すればよいのです。又、フットサル部門を作れば、部員資格の第3番目(「クラブ」(サッカー部の活動)に欠かさず部を出す)」という目的の障害が小さくなり、より広く部員を集められ、この数年のサッカー部員数激減にも歯止めがかかるのではないのでしょうか。

昼休みの遊びは確かに気軽ですが、どうしても質が落ち、競技性になる傾向に有ります。しかし、部やかではあっても組織化されたグループでプレイすれば、最低限の秩序は保て、更には果敢などの高揚を醸成できるというメリットが有ります。そうすれば、たとえ遊びに近い感覚であっても、快活にプレイ出来る。ここに気軽にサッカーをしたい者で組織化する意味が有ります。活動の場所と日程については大きな課題ですが、フットサルはそんなに大きなスペースが要らないので、解決可能な問題であると思えます(もしフットサル部門を作るのなら、その活動は、昼休みか片曜日の放課後の放課後で一番現実的だと思います)。

時代の変化に伴い、学校運動部の在り方も変わらなくてはならない時期にきていると思えます。様々な部活動への価値観を広く人たらを広く受け入れられる。21世紀の「学校クラブ」のありか、質素では有りますが、以上が僕の提案です。来年の新人生の勧誘などもフットサル部門の登録を促すようにして。

彼はいったんサッカー部をやめて、楽しみ志向のフットサル同好会設立運動に取り組みますが、この運動は広がらないまま頓挫します。当時はフットサルというスポーツが生まれたころでした。改めてサッカー部のミーティングに来て、「プレイ志向でフットサルを楽しめる部門を作りませんか」と提案したときの文書です。「ニーズの違いを受け入れてほしい」という主張です。

この背景には、106回生のころにあった部員資格をめぐる議論がありました。サッカー部はそもそもサッカー(Football)が大好きな人たちが集まる場であるはず。それならば競技志向であってもプレイ志向であっても受け入れていいじゃないかということです。熱い議論を経て、最終的には受け入れることになり、サッカー部の中に「フットサル部門」ができました。

けど、できはしたけどメンバーはほとんどいません。そこに1998年FIFAワールドカップ・フランス大会に日本が初出場し、昼休みサッカー人口が激増するできごとが起こります。これを組織化して「桐陰フットサルワールドカップ」が開かれました。昼休みのフットサル大会で、いまでも続いています。



1998夏合宿(107~109回)
最後の高校大心苑

1998フランス大会に日本が初出場。中塚も初出場
「昼休みサッカー人口」増
⇒6月に「桐陰フットサルワールドカップ」をクラブで主催
「フットサル部門」に特定の部員はいなかったが、校内フットサル大会の主催を通してフットサル好きを増やすことに貢献

今日は高校2年生と1年生も来ていますが、ついこないだまで彼らが運営してコート面で行われていました。写真はグラウンドで盛大に行われていたころのものです。Teachersが優勝したこともありました。

そんなことをやっていたのが108回生前後の部員です。このころのサッカー部は「夏までやるのが当たり前」だったのですが、いつの時代も悩める高校3年生です。108回生で夏までやったのは○印のついている2名だけでした。

事前アンケートの中で108回生の白根さん、いまはアーティストとして活躍され、保持さんとともに今夏の蹴球部「親子勉強会」で話をしてくれた方ですが、当時「暗病反男と言われていた」という言葉がありました（補足①参照）。卒業生は見たことがあると思いますが、ミーティングなどでこの「明言素と暗病反」を配り、忙しい、疲れた、難しいというような言葉を使ったらあかん。勢いのある言葉を使おうと言っていました。「幸福を生み出す心」も同じく部活で配り、こういう言葉で互いに言葉をかけ合おうと言っていました。





明元素
現状打破言葉

充実している	頑張ります	簡単だ
おもしろい	できる	すてきだ
楽だ	やれる	金がある
おいしい	まだ若い	きれいだ
努力します	利口だ	幸せだ
やってみよう	楽しい	元気だ
素晴らしい	試みる	イケル
可能だ	美しい	うれしい

成功を勝ちとるプラスの言葉を「ルギキ」



暗病反
現状維持言葉

忙しい	疲れた	難しい
つまらない	できない	いやだ
困難だ	ダメだ	金がない
まずい	もう年だ	きたない
どうしよう	バカだ	不慮だ
やりたくない	おもしろくない	回った
マイツク	苦しい	つらい
失敗した	わからない	大変だ

幸福を生み出す心

- 一 はい という素直な心
- 二 おかげさま ありがとう の感謝の心
- 三 ご苦労さま という思いやりの心
- 四 すみません という反省の心
- 五 させていただきます という奉仕の心
- 六 よかったね と共に喜ぶ愛の心
- 七 こんには と声をかけあう平和な心
- 八 いつもここにこにこ明るい心
- 九 どうぞ どうぞ とゆずり合う心
- 一〇 がんばりましょうね と励ます心

もう少し進めてから111回の話に行きますね。

110回生は全部で11人です。プレイ志向の部門ができたので、そちらに流れていったのです。競技志向の部員は、2学年で11人しかいません。こんな状況で「曜日制部員制度」を導入し、顧問が職員会議のため練習に出られない「月曜部員」を募集しました。「サッカー部はいま部員12人で大変困っています。お願いします。少しでも興味のある方、見学だけでも構いません。お近くの部員まで気軽に声をかけてください」とあります。けど、なかなか増えませんでした。

その次の学年が111回生で、サッカー部に熱い連中が大勢入部し、女子部員も5名入部します。女子は翌年も5名入部し、フットサルのゲームができるようになり、いまに至ります。フットサルマガジン『ピヴォ』でも紹介されました。このころは日韓共催の2002年FIFAワールドカップへ向けてサッカー界全体が非常に盛り上がっていた時期です。

そして筑波大学附属高校蹴球部も次の段階へ向かいます。3部門をまとめるクラブ長を置き、多様な取り組みを開始します。

111回生卒業アルバムの写真の中で、○で囲った金髪のお兄さんが本日、UAEのドバイから駆け付けてくれた初代クラブ長の小野塚さんです。2002年のワールドカップへ向けて、JFAのKick Together事業に応募して休日にフットサル大会を企画したり、パブリックビューイングをやってみたり、いろんな企画をしましたね。広報誌も作っていました。同期のサッカー部主将も来ています。

まずは小野塚さんからお願いします。

シーズン制 日曜日制 サッカー部 部員募集

・シーズン制部員とは？
⇒サッカーが好きで出てほしいシーズン中は
ひたむきに取組む人(練習内容は正部員と同じ)

・日曜日制部員とは？
⇒週一回土日出るだけで、サッカーが好きで
ひたむきに取組む人(練習内容は正部員と同じ)

筑附高 11.10.25 生徒部 部員資格 ⇒ サッカーが好きでひたむきにやる人
選手資格(試合に出たい人) ⇒ 試合時の安全のために
毎週決められた体のケア
(お灸やマッサージ等)をやります。

活動日 水木土 DuOリーグ
(土曜リーグあり) ⇒ リラックスタイムで出場でOK
公式戦 ⇒ 本人の頑張りに応じて
(但し、登録費は払ってもらいます)

部費について ⇒ 部活動に3割合に成っています。ご了承ください。

サッカー部は今部員12人で大変困っています。お原真いします、少しでも興味の方、見学だけでも構いません、お近くの部員まで、気軽に声をかけて下さい。

(主将 109-2 川口) GKも111の募集しています
(部長 109-4 室田)

111 回生のコメント

小野塚: 111 回卒業の小野塚と申します。

部活動から何を学んだかというテーマについて、卒業生アンケートに記入しながら、また他の人が書かれたものを読みながら思ったのは、白根先輩のアンケート回答にもありましたが、やはり精神論的なところがすごく多いかなと思っています。心を強く持つことや、辛くなった時にどう判断するかというようなことです。

ただ、先ほどの朝倉さんのお話をお聞きしながら思ったのは、例えばスポーツってすごく魅惑・魅了されるところがあります。でもそれって部活動じゃなくてスポーツの話だと思います。精神論的なものも、部活動でないと得られないものだったのかということ、話をお聞きしながらずっと考えていました。ではなぜ部活動なのかと振り返っ

111回生の卒業アルバム (2003年3月発行)

筑波大学附属高校 サッカークラブ女子部門

女子部員5名入部 → 翌年も5名
→ フットサルの試合ができる！
2002年FIFAワールドカップを機に、
サッカー界周辺が盛り上がる！
「クラブ長」を置き、多様な取り組み開始

たときに、例えば僕らの世代であれば、学校外のクラブチームに行くことも選択肢としてはあったと思います。ただ、クラブチームに行くには、そのセクションに受かる実力が求められます。それに対して部活動では、うまくなくても自分の気持ちさえあればそこできるといって、受け皿的な要素が非常に大きかったと思います。そこが先生がご説明された「クラブ」というところにも繋がってきます。先ほどから出ていたプレイ志向のフットサル部門。競技志向ではない人たちとも一緒に過ごせる場だったりするわけです。

「クラブ」というプラットフォームは、僕たち111回が入ったときに自分たちで考えたものでは全くありません。先輩たちが先生のもとでいろいろと考えてきたことが、たまたま僕たちの代のところでより組織化し、活動を広げていくことに繋がったのだと考えます。

そのときに先生からご指導いただいたのが、部活に属している人たちだけじゃなくて、サッカーを好きだと思っている人たちはみんな、概念的にはクラブのメンバー、仲間なんだということです。部活動のところと重なりつつ、もうちょっと拡張的な感じで、サッカーが好きな人たちの受け皿としてクラブというものを活動しやすいように組織化していきましょうという流れだったんですね。

精神的に何を学んだかというところがありましたけど、もう少し派生して部活動で何を学ぶかということについては、仲間を取り込んで、その人たちとどう一緒に活動していくかに取り組めたのは貴重でした。例えば、サッカー部でサッカーをやってます、部活動で走っていますだけでなく、その枠に入らないような経験が、クラブの活動としてできたことは素晴らしかったと思います。

ユニークだったのは、やはり女子部が創設されたということです。これもいまコメントしたことに通じるものがあります。創設の主導だったのが井上円さん、卒業アルバム上段の右から2人目の女性ですが、彼女を筆頭に他のメンバーも、「女子部がないのなら作ればいいじゃないか」と、つくってしまいました。

先生が先ほど言われたワールドカップのパブリックビューイングも、「やってみたらええやん」と。高校生なので全部自分たちでできるわけではなく、先生についていただいたりしながら、ある先生に激怒されたこともありましたが、そういったご指導をいただきながらやってみることができたのも、一つの経験として、学んだことが大きかったなと感じています。

中塚:同期のサッカー部主将大澤さんもおられます。どうでしょうか？

大澤:111回の大澤と申します。小野塚くんがいろいろ話してくれましたけど、僕は全然そんなこと考えてなくて、ただひたすら勝ちたい、負けたくない、もっとうまくなりたいたいという気持ちだけでずっとやっていました。「小野塚もそんなごちゃごちゃやってないで、早くグラウンドに出て、走ってボール蹴れよ」とずっと思っていました。20年経って、「小野塚はこんなにいろんなことを考えてやってたのか」というのをいま知って、久しぶりに来てよかったなと思っています。ありがとうございます。

中塚:これは、111回から112回にクラブ長が代替わりしたときのサッカークラブの広報誌です。こういうものを定期的につくって全校生徒に配っていたのがこのころです。「校内のフットボールを盛り上げよう」と、いろいろやっていましたね。

続けます。



◆メディアでの紹介

この頃、DUO リーグやサッカークラブのことが新聞に何度か取り上げられました。読売新聞の記事には、競技志向のサッカー部、当時「アスリート部門」と言っていましたけど、そこからフットサル部門に移って活動を続けた部員のインタビューが載っています。日経新聞の記事は反響が大きく、いろんなところから問い合わせや連絡をもらいました。

校内フットサル大会も朝日新聞で取り上げられました。ワールドカップの出場国名でやった時の記事です。また『サッカークリニック』（2003年5月号）には私のインタビューが掲載されました。



◆U-18 フットサルへの取り組み

フットサルのほうも、このころ動き出しました。私は東京都サッカー協会フットサル委員会の創設期からのメンバーで、ユース年代をずっと担当しています。2001年夏に、全国初のU-18公認フットサル大会をはじめました。いまでは全国に広がる大会の起点と言えるでしょう。本校体育館はフットサルの聖地となっています。

一方、女子部門もこの頃から公式大会に出るようになりますが、高校生年代の大会はなく、大人の大会に出させてもらっていました。相手は大人ですからボロ負けの連続です。初めて公式戦で勝利したのが2004年3月の第4回東京都女子フットサル大会です。相手はハロー!プロジェクトの芸能人チームでした。

高校生年代の大会がなかった彼女たちは、だいたい後の話となりますが118回生のときに、他校に呼びかけて自分たちで女子高生大会をつくりました。いまも5月に「高校生女子フットサルチャンピオンシップ」という名前で続いています。高校3年生が活動に区切りをつける大会を自分たちで主催しています。ただこの大会も、立ち上げのころはよかったのですが、途中から大人への依存傾向が強まり、自分たちでやろうとしない数年間がありました。コロナ前からみられた傾向です。

◆卒業生とのつながり

蹴球部創部80周年の2004年に、卒業生の組織である桐窓サッカー倶楽部からシュート板が寄贈されました。

114~116回生の2005年夏合宿は、3年生もフルに参加しました。そこに111回生の女子部創設メンバーもOGとして来てくれました。卒業生がいろんな活動に関わってくれる風土が、この部には昔からあります。

決勝トーナメント・順位決定リーグ

期日：平成13(2001)年夏(5月) 会場：中央体育館

2001年夏 全国初のU-18公認フットサル大会

ここから全国に広がる

順位	チーム名	勝	敗	引	得点	失点	得失差
1	筑波大学附属女子サッカー部	5	0	0	10	0	10
2	筑波大学附属男子サッカー部	4	1	1	9	3	6
3	桐窓サッカー倶楽部	3	2	1	6	3	3
4	筑波大学附属女子サッカー部	2	4	0	9	13	-4

一方、女子部門は...

第2回「東京都女子フットサル大会」に初出場 ※レディース(大人)の大会しかなかった

第2回 2002年 2月10日 小金井東中(女子部) 初公式戦

順位	チーム名	勝	敗	引	得点	失点	得失差
3	FC LORRINA VALENTE	1	2	0	6	11	4
2	Forest Annex	2	1	0	5	7	3
4	城北クラブレディース	0	2	0	3	4	-1
5	筑波大学附属高等学校	0	3	0	0	17	-17
1	横浜アクトサルススクール feat. OALD	2	0	1	12	1	11

グループ B

順位	チーム名	勝	敗	引	得点	失点	得失差
1	小金井サッカークラブ	3	0	0	9	0	9
3	城北クラブレディース	0	3	0	3	12	-9
4	筑波大学附属高等学校 サッカー部女子部	0	3	0	0	12	-12
2	Fuchu Athletic Ladies	0	2	0	6	10	-4

グループ H

順位	チーム名	勝	敗	引	得点	失点	得失差
1	小金井SC	3	0	0	6	1	5
3	ゴッラスブリランテス イチゴビー	0	3	0	0	19	-19
2	筑波大学附属高等学校 サッカー部	1	2	0	3	11	-8

第3回 2003年 2月15日 府中市総合体育館 ※大人相手に大苦戦

第4回 2004年3月27日 府中市総合体育館 ※女子部和勝利 相手は「ハロプロ」=芸能人チーム

女子高生フットサル大会の創設と展望

—筑波大学附属高等学校に始まるU-18女子フットサル大会

118回生

筑波大学附属高校平成21年度卒業生 大藤麻祐子

女子高生フットサルプレイヤーの今

はじめに、現在の女子高生フットサルプレイヤーを取り巻く環境について述べたいと思います。

私が筑波大学附属高校サッカー部(現女子蹴球部)に入部した平成19年(2007年)ごろ、チームは、①民営フットサルコートによる女子フットサル大会、②全日本女子フットサル選手権東京都大会、という2種類の大会を基軸に活動していました。

民営フットサルコートによって開催される大会には、周辺地域で活動するレディースフットサルチームが参加しています。部員の多くが初心者という私たちのチームにとってこの大会も決して容易ではありませんでしたが、チームが成熟する3年生の引退期(例年5月ごろ)の大会では、準優勝がそれに近い成績を収めてきました。しかしながら、このような大会に出場するチームはレベルにばらつきがあり、また出場チームも毎回一定ではないため、大会ごとにレベルが異なり、自分たちの成長度を測る目安としてはふさわしくありません。また、卒業生とのつながりも、この大会において関係が薄くなる傾向があります。

いまも5月に「高校生女子フットサルチャンピオンシップ」として開催

◆グラウンドの芝生化？

それから、半分遊びではありますが、グラウンドの芝生化にも少しだけ挑戦してみました。JFAのグラウンド芝生化プロジェクトの方を知人経由でご紹介いただき、畳一畳分ぐらい、国立競技場と同じティフトンという芝生をしばらく育てていました。毎日水をやり、伸びてきたら散髪し。けっこういい感じになってきたけど、夏の終わりにちょっと油断していると、あつという間になくなっちゃいました。

ここに写ってる116回サッカー部主将が本日来てくれています。彼は高校生のころ、DUOリーグ会議、大人の会議に、高校生オブザーバーとして毎回参加していました。高校生の参加を呼びかけてはいましたが、ほぼすべて参加したのは彼だけですね。114回生のころに総合的な学習の時間が始まり、本校では3年時に「金曜スタディ」の名称で取り組み、卒業論文的なものを書くようになりましたが、彼はDUOリーグをテーマにまとめました。

柳井さん、コメントをお願いします。

116回生のコメント

柳井:116回の柳井です。僕らは113回生ぐらいから競技志向の強い、いわゆるサッカーチームっぽい雰囲気だったんだろうなということを、先輩方の話をお聞きし、また後輩たちの話からも感じています。先ほどの「夏まで残る」話で言うと、僕らの学年は10人いましたけど全員そのままやっていました。本当にサッカーが上手くなる、勝とうと思いつながらやっていた年代かなと思います。

DUO会議に参加させてもらい、僕も非常に勉強になりましたし、DUOリーグにはすごく近い距離でいました。僕らは初めてDUOリーグで優勝したんですけど、配られた年表にそれが書いてないってことだけ、不満として先生に申し上げておきたいなと思っております(会場笑)。

部活動で学んだことでは、自分がサッカーを一所懸命やり、サッカー部の中で一所懸命練習して存在感を出していくと、「じゃあおまえちょっとDUO会議参加してみるか」という話になります。芝生のお話もそうで、こういうところに呼んでいただけるようになります。僕は大学も筑波大学で蹴球部に所属させてもらいましたが、そこで一所懸命やってきたことで、いまになっても「おまえいま何やってんの」と言ってもらえます。スポーツを一



所懸命やってきたことが他の場面にも繋がっていくのは非常にありがたいと思っています。たまたま場所が部活動でしたけど、スポーツを通じて学んできたことかなと思っています。

本当に「金曜スタディ」含めていろんな場面で、サッカーだけじゃない面白いことをやらせていただいた3年間だったなと思います。

中塚:ありがとうございます。この学校では5年に1回ぐらい担任が回ってくるので、担任学年とは部活動以外でもいろんな形で関わることが多かったなと思っています。

3. 校内的な承認以降—安定と停滞 (2009~24)

116回の次の学年が117回。先ほどのスライドにもありましたが、当初は完全に「サル」でした。その彼らが3年間で「人間」に成長したということ、彼ら自身が自覚した学年だったと思います。

学校の正式な卒業式後にサッカー部で卒業式をやるんですけど、その中で117回のある卒業生が、「先生、サルだった僕たちを人間にしてくれてありがとうございました」と言って卒業していったのを強く覚えています。

その次の学年からなんです。時代の節目ははっきり見えるものではない、むしろ曖昧なものだろうと思います。少しずつ少しずつ、いろんなことが変わっていったのでしょけど、もし節目として設けるなら、校内的な承認、これを117回生たちが頑張って求めたあたりかなと思います。

それまで校内的には、サッカー部の中に競技志向のアスリート部門と、プレイ志向のフットサル部門、女子部門があるという形でした。各部門は承認された部ではないので、実質的な顧問は私だけです。ちゃんと承認してもらえるとさまざまなメリットがあるということで、フットサルも正式な部になり、女子も部として自立し、各部に顧問がつくようになりました。校内向けの話ではありますが、そういうメリットを考えた117回生たちが頑張ったのはたしかです。

そのころはよかったです。けど何でもそうですが、「あるのが当たり前」になってくると依存傾向が強くなり、徐々に様子が変わってきます。その先はスライドにあるとおりです。私自身もおっさんになってきて、生徒との距離感を感じるようになったのもあると思います。

ここから先のことを駆け足で見たいと思います。

**校内的な承認以降
安定と停滞 (2009~24)**

- ◆118~123回...人数多いがコミュニケーション不足
諸課題噴出
- ◆124~128回...諸課題山積
126回 「ゼロからのリスタート」
127回 中塚は担任長に。部活は生徒主導で
128回 「生徒主導」の可能性と課題
- ◆129回以降...コロナ禍による断絶。顧問の代替わり
- ◆そしていま...

参考) 高校2年生は「134回見込」



◆チャリティフットボール

こんなこともやってたんですね。けど、こちらが主導です。生徒たちがこういうことを思いつくことはありません。東日本大震災のときのことです。春休みの部活はできなくなったんだけど、4月3日から活動できるようになり、初日のイベントには卒業生が大勢集まりました。1日で20万円の寄付が集まり、被災地支援のNPOに寄付しました。チャリティーフットボールはその後も何度かやっています。2014年8月には豊島区のNPOと連携して、被災地の中学生を招待してサッカーをやりました。彼らの校庭には仮設住宅が建っているのでサッカーができない状況だったんですね。123、124、125回生になる学年がいたころの話です。

これは合宿の様子です。3部門が集まってかなりにぎやかです。2015年夏合宿の右端は、フットサルや女子の部門をみている速水先生ですね。



◆校外ラン禁止？

こんなものも出てきました。2015年度「ねずみ坂使用に関する基本方針」という文書です。主将責任者会議名で出ています。ねずみ坂というのは学校の近くにあるいい坂で、各部がトレーニングでよく使わせてもらっています。サッカー部は週20本走らないと週末の試合に出られないので、空き時間をみつけてよく走っていました。この文書の最初のところを読み上げると、「昨年、通行人に迷惑をかけたことにより使用禁止となっていた」とあります。「同じ過ちを犯さぬよう、以下の基本方針を確認する」ということで、全ての部活動の主将責任者会議で合意したものです。

<p>2015年度 (在校生は124~126)</p> <p>ねずみ坂使用に関する基本方針</p> <p>2015年3月 主将責任者会議</p> <p>これまで、トレーニングに利用してきたねずみ坂だが、昨年、通行人に迷惑をかけたことにより使用禁止となっていた。同じ過ちを犯さぬよう、以下の基本方針を確認する。</p> <ol style="list-style-type: none"> ねずみ坂は公共の道である。使わせていたたいたことを感謝し、感謝を心がける。 絶対に歩行禁止である。歩行者がいる場合は歩行者優先で歩行を中止することもある。特に歩行者を優先し歩行者を譲歩すること。歩行者の歩みも大切である。 下りは一般の方が通らないところを避ける。上から見て一般の歩行者も通っていると思われる。 下りはスピードを出さず、滑りもしつづけて歩行者を避ける。 常に礼儀正しい。一列で走り、競争は禁止する。追い越さないように走る順番を考える。 周りに注意が深い。騒音となるような大声や大声は禁止。ただし騒音はなるべく減らすこと。 学校が提供している情報は、小学校の下校と異なることがある。注意すること。 <p>歩行者、特に高齢者や小学生は自分たちが居る以上に恐怖を感じることもある。このことを心に留め、安全に歩行者を譲歩し、トラブルを起さないよう、トレーニングを行いたい。</p>	<p>「昨年、通行人に迷惑をかけたことにより使用禁止となっていた。同じ過ちを犯さぬよう、以下の基本方針を確認する」</p> <p>2011年度には「校外ラン禁止」もあった(「同じ過ち」...)</p> <p>「校外ラン」のルール作りは、120回のクラブ長兼主将責任者会議長の平塚大樹が力を注ぐ！</p> <p>生徒の変化はあるだろう... 同時に、学校や部活動に対する「社会のまなざし」の変化が...</p> <p>・コミュニケーションの変化 →その場では言わないで... →怒られることはしないで...</p>
---	--

実は2011年度にも「校外ラン禁止」がありました。全く同じ理由です。学校外の公道を走っていたある部の生徒が通行人と接触し、その場で「ごめんなさい」を言えばいいのに言わずにいなくなりました。「けしからん！」という通報が学校にあり、それを機に校外ランができなくなった事件です。

120回のクラブ長兼主将責任者会議の長をやっていた平塚大輝くんがルール作りに力を注ぎ、何とか校外ランができるようになったのですが、また再発したというのが2015年度の文書です。生徒の変化

はもちろん感じますが、同時にこのころから、学校や部活動に対する社会の眼差しの変化があることを感じます。コミュニケーションの質の変化。その場で怒られておしまいにはならないんです。ぶつかられた方もその場では何も言わず、学校に通報する。SNSが出てくるより前にあったことです。

生徒の側からすると、怒られそうなことは先回りしてもうしない。だんだん小粒になっていった時代と言えるでしょうか。121回の遠山さん、いかがでしょう。

120 回代のコメント

遠山:121回の遠山と申します。校外ランのことで言うと、一つ上の平塚さんがすごいがんばって復活させたという話は聞いていました。当時は校外ランができるようになったんですけど、すごい努力されたんだと改めて思いました。

部活動で学んだことは、自分の中では「周りをみろ」と言われたことがいまに生きているかなと思います。試合の中でサッカーとして周りを見るだけでなく、普段の練習のときでも、次の練習これだからコーンを準備したりボール用意したりということがあるんですけど、その中でお互い見合って誰も動かないことがあった時に、周りの人が何をしようとしているのか、自分がいま何をすることを求められているのかを考えるくせをつけていただいたなと思っています。

あと、自分としては「迷ったらやれ」という言葉は、その当時は、迷ってるのに何でやるんだろうと思ったりはしたんですけど、いまになって思うと、迷ってるぐらいだったらやった方がいいと思っています。自分自身、理系の大学院で修士まで行って、就職が決まって内定式まで行ったんですけど、博士を取ろうかどうか迷ったときには、これ本当なんですけど、「迷ったらやれ」という言葉が頭に浮かんで来て、内定を辞退して博士に進学して、いま研究に携わっています。自分が研究者になるなんて思ってもみなかったんですけど、思い返してみると高校時代に言われていたこと、考える癖っていうのがいまに生きているんだと思います。

中塚:ありがとうございます。この頃の高校生が実はもう1人います。いまマイクを持ってあちこち回ってくれている皆川さんは、サッカー部ではありませんが122回の卒業生です。

皆川:122回の皆川です。私は中学校から筑波に入って中学は陸上部で、その頃熱血の顧問の先生がいらっしやいまして、つらい練習があってもやっていたことを思い出すと、いまある課題が序の口に見えるというか歯を食いしばってやった経験が今に生きているなと思っています。なかなかフィジカル的につらいことって大人になるとないと思うんですけど、その頃の思い出をバネにいま頑張ってるなと思っています。ありがとうございます。

中塚:いきなりの無茶ぶりですがコメントありがとうございます。

◆近年の話題

このあたりになってくるともう最近の話になってきます。

2018年1月の第5回東京都女子ユースフットサルフェスティバルが、東京中日スポーツで取り上げられました。冠スポンサーとして SHIBUYA109 が付



いてくれたところです。U-18 女子大会がとても華やかに展開されていましたが、この後、コロナになり、冠スポンサーも離れてしまいます。

それどころか活動できない時代があって、湘南高校との定期戦はオンラインのみ。それがようやく4年ぶりに再開。そして波崎の合宿は夏ではなく春に開催。春合宿には、鹿島アントラーズで働く2人のOBが来てくれました。



復活した校内フットサル大会は、コート面でやっています。夏の陣と秋の陣。ギャラリーはいっぱい集まってくれるんだけど、1面だけなので出場チームは限られます。ついこの間終わった大会の様子です。高校2年生は昨日まで修学旅行で沖縄に行っていましたが、修学旅行前の決勝戦の様子です。

この企画運営をした現クラブ長が来ています。部活動で学んだことを言えるような立場にはないと思うけど、ここまでの先輩の話を聞いての感想を聞かせてもらいたいと思います。



現役高校生のコメント

志村:いま高校2年生で、順調にいけば134回卒業となる志村です。僕が高校の部活で学んだこととしては、やっぱり勝つ楽しさです。全力で遊んだ結果、勝てるっていうのは、非常に大きかったなと思っています。僕はフットサル部に所属しているんですけど同じ学年の部員がいなくて高校2年生は僕1人です。このスライドは今年の2～3月の大会で、1つ上の先輩と一緒に出場した大会で、初めて東京都の高校の中で優勝することができました。当時僕は1年生1人だけで、先輩に何とかついていくという状況だったんですけど、ここで初めて全力で試合に取り組む、全力で楽しむことを実感できました。僕がフットサル部に入ったのは、競技志向とい

うよりもどちらかというプレーを楽しむことを目標にして入ったんですが、楽しんで結果も伴ってきたのが、自分の中でいい経験になったと思います。

代替わりして僕が主将になって、いまチームでは「楽しんで勝つ」という目標を掲げています。やっぱり楽しんで試合や練習しないと、部活に取り組んでいることが実感できないというか、楽しくプレイして勝ったときの喜びは非常に大きいものがあると思います。それを1年生と共有してできるように、楽しみながら頑張っていきたいです。

中塚:ありがとうございます。その1年生が隣にいるのでひと言。

中川:1年生の中川です。いま志村さんが「楽しく勝つ」っていうことを言ってくれたんですけど、実際に今年の11月4日に試合があって、そこでも実際にみんなで頑張っ、楽しく勝つてということができたので、その試合が1、2年生だけの初めての試合だったので、そこで記憶に残るような結果が出せたっていうか、そういう楽しみ方ができたっていうのがすごく良かったです。これからも楽しくフットサルやって楽しく勝つことができたらいいなと思っています。

中塚:最近の様子を写真で少しだけ。11月3日に本校体育館で行われたU-18女子フットサルリーグの様子です。11月17日にはグラウンドで、新人戦の地区大会がありました。黄色ユニフォームの筑波大附は11人いますが、対戦相手の都立高校は7人しかいません。部活動の危機は身近なところに来ています。聞くとところによると、この学校の野球部員は1人だそうです。

クロージング

◆演者からのコメント

中塚:~だいぶ時間も経過しました。まだまだいろいろあるんですが、ここまでの話を聞いて、高橋さん、朝倉さんから感想などをいただけたらなと思います。いかがでしょうか。

高橋:やっぱり部活は学ぶことがすごく多いですね。私も毎年のように、高校のOB会のようなところに参加すると、温度差があることを感じます。私は最近の人は異星人として理解しています。息子であろうと全く理解ができる存在ではないという前提で捉えています。

聞いていると、一つの活動に対しても全く違う思いとか、全く違う考え方を持っている。振り返ってみると、おまえそんなこと考えてたのか、とかですね。でもそういう人たちが生きていくときに、この非日常の夢中の場っていうのは、また組織化がされてない部分、生身でモロにぶつかって悩んでっていうところで、いい鍛錬の場になっているんじゃないかなと思います。イギリスのスポーツでも、ミドルマネジメント育成のための非常に重要な場になっていましたので、日本の部活もそれに準じた役割を果たして、それぞれが大きな収穫を得ているんだなという印象です。

自分自身を振り返ってみると、部活のことしか覚えてないかもしれないですね。中学、高校、大学もかもしれません。



中塚:朝倉さんどうぞ

朝倉:卒業生の方々にいろんなお話を聞いて、考えさせられるとともに、私が学ぶことも多かったな思っています。クラブって、実は社会学事典にも出てくる学術用語として使われるんです。何でそうなのかというと、スポーツだけでなく、クラブっていたるところにあることに皆さん気付くと思うんです。繁華街のクラブもあります。スポーツだけではなくありません。サロン 2000 の「サロン」っていう集団も、社会にとって重要視されるんですね。

なぜかという、そこで扱われる話とか、あとは人々の関係性というのは、人間が作る集団の中でも非常に公共的な意味を持っている。自由な議論ができるとか、自由なやり取りができる場で、こういう場は意外になかったりするんだけど、そういう機能をクラブやサロンが持っていたと。

部活動って結局クラブの活動する場所だと思ったときに、小学校でもバスケットボールクラブとかサッカーのクラブってあるし、中学校でも部活動というクラブの活動があるし、今回特に注目していた高校のクラブですよ。小学生が作るクラブ、中学生が作るクラブ、高校生が作るクラブとあって、クラブの質は高まっていくと思うんですけど、まさに、高校生が作るクラブってこんなこともできるんだということを感じました。

中塚先生がつけてくれた膨大な資料の中で、例えば「鈴木さんからの提案 サッカー部員の皆様へ」というのも、自分はこういうクラブを作りたいっていうのを意思表示し、それを実現しようとしていたりしています。また、校内フットサル大会を運営するというのも、先ほど私がお話した、自分たちのためだけじゃなくて、みんなのためになるようなことをする。原点は、自分が遊びたい、楽しいことがしたいということですけども、そうやって学校とか他の人のためにと繋がっていくのがいいクラブなんだとしたときに、附属高校の、高校生が作るクラブというのは、モデルになるようなクラブだと思います。「部活動」って名前がついていますが、クラブなんだなというのを感じているところです。

こういうクラブがあるんだというのを、研究者の立場からすると、もっともっといろんなところに発信されていくといいなと感じました。

◆中塚義実

中塚:ありがとうございます。残り時間がなくなってきましたけど、皆さんの手元にお配りした配布資料の最終ページのスライドだけ、駆け足ですが今日のまとめとしてみておきたいと思います。

<p>約38年間の“定点観測”で思うこと①</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆着任当時(1987):「自由な校風」と言っているが... ◆集会に象徴される無秩序—何もしない教師と動かない生徒 ◆「自治会検討委員会」は熱心に議論している。しかしそれは一部 ◆「教科指導に専念できる」「生徒指導はしなくていい」と言い切る教師 ◆「教科王国」—教科間の連携なし (ただし「飲み会」は結構あり。生徒の話をよくしていた) ◆「学級王国」→「学年(担任団)王国」(他学年は口をはさまず) ◆学校行事は生徒部or担当者任せ ◆部活動は放ったらかし(卒業生が仕切る/熱い教師が切り込む) ↓ ◆「自主・自律・自由」と言い換えた(1990前後) ◆附属学校の存在意義が問われる(「反対」ばかり言ってもらえない) ◆国立大学法人化(2004年度) ◆働き方改革/コロナ禍(2020~21) 	<p>約38年間の“定点観測”で思うこと②</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆「いい加減」だったが、「よい加減」でもあった —それなりにバランスはとれていた(不満は多々あるが...) ◆やりたい人がやりたいところで力を発揮 ◆やりたくない人がやらない自由もあり(?)(互いの事情はリスペクト(?)) ↓なすべきことが増えてきた↓ ◆みんなで応分に負担/機会均等=“ふつ”を目指す(?) ◆やりたくない人までもが駆り出される。 もともとやりたくないから、「ここまでなら」の線引き ◆ルールやマニュアルが詳細に(「ここに書いてあるから」が根拠) ルールやマニュアルへの依存傾向が高まり、現場で考え、行動することができなくなっているのでは... 「自由」の喪失 ◆「働き方改革」「コロナ禍」が追い打ちをかけた → 今後が心配 → 日ごろからのコミュニケーションを!
--	---

<p>約38年間の“定点観測”で思うこと③</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆社会も生徒も、私自身も大きく変化 ◆けど、言っていることもやっていることも、基本的には変わらない。 「言葉」と「行動」で伝えてきた(つもり) <p><HR・学校行事・授業の中で...></p> <ul style="list-style-type: none"> ・多数決禁止 ・当たり前のことをさりげなく ・勝負どころで爆発しよう ・当事者意識を持つ ・お客さんはいらん。批評家もいらん ・優先順位をつけろ ・ゲーム後はさわやかな握手 <p><加えて、部活動では...></p> <ul style="list-style-type: none"> ・声出せ！走れ！当たれ！ ・まわりを見ろ！（遠くから順に） ・予測！（楽観的と悲観的） ・もっとやれ！ ・迷ったらやれ！ ・楽な道と難しい道があつたら... ・アマチュアに引退なし 	<p>いま...</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆最近(10年以上)いつも言っていること 「(自分のアタマで)考えろ！」「アクション起こせ！」 「全体を見ろ！」「サンマ(時間・空間・仲間)！」 「ちゃんとしゃべれ！」「聞け！」「Face to Faceや！」 「あいまいにするな！」「やり切れ！」「ちゃんと遊べ！」 ◆最近感じる生徒の様子 言われたことはきちんとやるし、素直だが... ・「コミュニケーション」の質と量が大きく変わってきた ・ソウゾウリョク(想像力・創造力)の欠如 ・「決断」できない(多数決に依存／「先生」に依存) ・迷ったらやらない／タイパ・コスバ重視で楽な方を選択 “遊び”が下手(生徒も教師も)。このままでは... 長期的視野で“教育”のあり方を考え、行動したい...
--	--

私が着任した当時からみると、サッカー界は大きく変わり、生徒もずいぶん変わってきました。学校の様子も変わってきました。はじめのころはただ「自由な校風」と言っていました。「教科指導に専念できる」と思って都立高校から異動してきた先生も多かったです。「生徒指導はしなくていい」と言い切る教師もいました。教科王国、学級王国、学校行事は生徒部の担当者任せ、部活動はほったらかし…。着任したころは多くの部活がこんな感じでした。その分、自由度はすごくあったのかもしれない。卒業生との非常に濃いパイプで、100年のうち70年ぐらい続いてきました。

1990年前後に、「自由な校風」に自主・自律をつけて「自主・自律・自由」と言うようになりました。附属学校の存在意義が問われるようになり、国立大学は法人化します。働き方改革やコロナ禍もありました。

38年間を振り返ると、最初の頃はすごくいい加減だったけど、それなりにバランスが取れていたのかもしれない。教員の方も、やりたい人がやりたいところで力を発揮していたのだと思います。逆に言うと、やりたくない人はやらない自由があつたのではないかな。それを皆で応分に負担しようとして、やりたくない人までも駆り出され、元々やりたくないから「ここまでなら」という線引きをするようになり、そのためのルールやマニュアルがどんどん詳細になり、ルールやマニュアルが全てになって自由が奪われる。少し抽象的ですが、皆さんの現場にも当てはまるのではないのでしょうか。

「働き方改革」や「コロナ禍」が追い打ちをかけ、今後が心配です。

社会も生徒も私自身も大きく変化しましたが、言ってることややってることは基本的には変わりません。ホームルームや学校行事、授業の中では「多数決は禁止」だし、「当たり前の事をさりげなく」と言い続けます。これは「勝負どころで爆発しよう」とワンセットです。

配布したもう一つの資料には、ホームルームの生徒向けに言ってきたことをまとめました。「当事者意識」という言葉をよく使います。お客さんいらん、批評家もいらん、優先順位付けろ。これらに加えて部活動で最初の頃に言っていたのは、「声出せ、走れ、当たれ」だけです。周りを見ろ、予測、もっとやれ、迷ったらやれ、それから「楽な道と難しい道があつたら難しい道を選べよ」ということも言いました。いまでもずっと伝えていることですが、ここ10年、表現が少し変わっています。

「サンマや」「ちゃんとしゃべれ」「聞け」「フェイストゥフェイスや」「曖昧にするな」「やり切れ」「ちゃんと遊べ」…

言われたことはきちんとやるし素直ですが、コミュニケーションの質と量が大きく変わり、ソーゾー力(想像力、創造力)欠如、自分で決断できない、迷ったらやらない。タイパ、コスバ重視で楽な方を選択…

これは生徒だけじゃなくて教員も同様です。だけど、これをやらないと働き方改革にならないのも確かです。

遊びが下手くそ、このままでは…

長期的な視野で教育のあり方を考え、行動していきたいなど、改めていま思っています。

“遊び心”が全ての始まりです。

本気の遊びが人を育て、社会を育てるということで2時間半、結局ノンストップになってしまいましたが、一旦締めたいと思います。

最後に、今回のシンポジウムにご後援いただいた桐窓サッカー倶楽部会長の菅原さんをお越しいただいていますので、ひと言ご挨拶をいただければと思います。

人類最高の“遊び” football
“遊び心”がすべてののはじまり！

本気の“遊び”が
人を育て
社会を育てる



菅原: 菅原です。よろしくお願いします。先生ありがとうございました。ご苦労さまでした。

なかなか興味深い話をありがとうございました。部活のあり方もそうなんですが、OB会のあり方を真剣に考えていきます。以上でよろしいでしょうか。

中塚: ありがとうございました。日本部活動学会にもご後援いただいています。会長の神谷先生はオンラインでご参加でしたが途中で退出されたようです。

以上で締めたいと思います。高橋さん、朝倉さんは、この後の懇親会も大丈夫ですよ。では同じ場所で、今度は飲み食いしながら、もう少しざっくりと話ができればなと思います。

ご登壇くださった高橋さん、朝倉さん、そしてご参加くださった皆さん、ありがとうございました。



注) 第2部の資料・写真等は、出典・提供者が明記されているものを除いて中塚義実所蔵・提供。

補足① 108 回生: 白根昌和氏の事前アンケートより

◆高校時代の部活動を通じて身につけた思考や行動が、今も役に立っていると感じることはありますか。それはどんなときですか。

とても役に立っています。むしろ、私の人間形成は高校時代の部活動だった。と、そのエピソードを社会に出て話す機会が多いです。そして、その感想は、「部活の概念を超えてる(笑)」というものが多いことに驚きます。

印象的なものとしては、「自分勝手と自由の違い」なのかと思惟します。

中塚先生の指導方針は、具体的な戦術を逐一教え、型に嵌めることはなかったのですが(筑波大式 C 点は今でも覚えています。)とにかく、課題が見つければ「その場で話し合え！」というスタイルでした。そしてある日突然問題解決につながる難解なヒントとなる言葉を教えてもらい、チームが止揚していく。というプロセスを踏んでいたのだと思います。それは、「(ある程度)自由にプレーしていいけど、(チーム内の)自分のプレーに責任を持ち、そして(仲間と)議論しながら発展させよ。」と言い換えられるのかと思います。これは、現在「答えのない問題を解く」ことが課題とされている時代においても、とても貴重なトレーニングだったのだと思います。

私自身は、高校入学当初はサッカーのイロハもわからず自分勝手なプレーを「自由にやらせてもらえない。なぜ怒られるのだ？」と履き違え、しかし徐々にマナーやルールが理解でき、仲間と議論しながら解決策をトライアンドエラーで模索する中で、「自由にするためには責任が多い」ことを学びました。

現在、アーティストという自由業を営んでおりますが、高校時代の部活動を通して「自分勝手と自由の違い」を意識できていなければ、本当に社会的には破滅者になってしまっていたかもしれません。社会上のマナーやルールを尊び、プロジェクトメンバーと議論しながら、その上で責任を持って自分のやりたいことを自由にやらせてもらう。言葉で書くと当然のことのようですが、上記を主要五科目の勉強の中からや大学で、怒られながら口酸っぱく言われる実体験の場はあるでしょうか？

そう考えると、高校時代の部活動がいかに自身の人間形成に役立ったのかと中塚先生をはじめ、108 回生の同級生に感謝いたします。

◆高校時代の部活動で言われた言葉で、今でも心に残っているキーワードはありますか。それはどんな言葉ですか。

二つあります。両方とも一年生の時(生意気な時)だったと思いますが、

・「暗病反男」

・「サッカーには攻撃と守備時の両方に楽観的な時と悲観的な時がある。しかし、白根は攻撃の楽観的な時しかプレーしていない。それはサッカーの 1/4 だ。」

しかし、現在の私の仕事を表していただく際には「明るく、しかも粘り強くプロジェクトに取り組む」と時々仰ってもらえることがあります。ですので、それが強みなのかなと思い、現在ではその姿勢で日々仕事に取り組むようにしています。

表現という仕事は、楽しいことだけでなく、むしろ 8 割くらいは苦しいと思うことが多いですが、残りのわずかな部分の喜びが忘れられず、続けることができます。また、どうせならば苦しいことも楽しもう！と明元素漢として振る舞い、周りを盛り立てようと心掛けています。

いつの間に上記の二つを克服できたのか？(できたのか??)分かりませんが、サッカーと芸術はとても似ているなと感じることが多くあります。

当然、他にもいろいろありますが、個人的なこととしては上記 2 つが特に挙げられます。

補足② 103 回生：池田知之氏の事前アンケートより

◆高校当時の部活動に対して、もっと改善したほうが良いと思っていたことはありますか。

質問に対する回答ではないがコメント。親として最近の中高生のサッカー生活を見た結果思うこととしては、必ずしも部活である必要はない、である。我々世代においては、特にチームスポーツを行う場合は、学校の部活以外の選択肢は少なかったため、部活に入るのが当たり前、というか極端に言えばそれ以外の選択肢が無かった。対して現代においては、情報もツールも選択肢も多く、サッカーのようなメジャースポーツの場合は部活以外でサッカーをすることは可能であり、その中からどこでどうやるかを選択すれば良いと考える。確かに部活は学校とセットになっているので、入りやすい、多くの場合授業後に移動も不要、金銭的な負担も少ない、等のメリットはある。対して、学外でのチームに所属する場合、部活のメリットはデメリットになるが、学校以外の人との交流、自分のレベル、目的にあったチームに入れる、等のメリットが存在する。部活にしかない特権は注目度の高い高校選手権だろうが(サッカーのレベルはさておき)、そもそも一握りのチームが対象になる話である。スポーツである以上試合に出ることは重要なポイントとして考えており、お互いに刺激しあえるチームメンバーがいて適切な努力を積み重ねれば試合に絡めるチームに所属することは大事なことでないだろうか。逆に、どうやってもレギュラー確定、というようなチームに所属することも成長という側面からすると賛同しにくい。何を求めるかは当人次第ではあるが、個人のニーズにあったものを選べるのが重要と考えることから、部活である必要はない、となる。

そう考えると、我々世代の多くが経験している、練習がきつい、さぼりたい、という気持ちは非常に時代を表している、と感じる。要は本人が納得しているのか、だと思っているのだが、納得しないままやらされているのであれば、好きで始めたことなのにおかしな話である。当時の部活は、一生懸命な部活ほど、きつくてつらいもの、というイメージがあったと思う。むしろ、そういう取り組みや姿勢が正しいという美学の様なものがあった。きつさの先にこそ、得られるものがある、という精神論であった。これに対し、そもそも娯楽や趣味を行う情報もツールも多い中で、好き好んでサッカーをやり、且つ選択肢の中から選んでチームに所属しているので、姿勢が全く違うのが現代。勝利を目指すチームにおいても、非合理的な、つらい、大変、きつい、は逆に勝利を遠ざけるもの、という理解も広まっている。根性もメンタルも重要だが、根性論、精神論だけでは勝てない。今もそういうチームはあるが、徐々に敬遠され、選手が集まりにくくなっている。息子二人はそれぞれサッカーレベルの違う場所でサッカーをしてきたが、きついから練習行きたくない、とか、練習をさぼる、という発想がない。練習さぼって遊びに行く、はチームメンバーにもなく、そういう発想になるのであれば、そもそも辞めてしまう、そこまでしてやらなくてはならないもの、ではないのが現代。100人が100人そうだとはいえないだろうが、30年前と今を比較すると、確実にその変化は起きている。これは否定的な意味合いではなく、サッカーに限らず、これが全体的なスポーツのレベルをあげている根底の一つにあるのではないだろうかとは私は感じている。これに加え、サッカーに限って言えば、もっと頻繁に小中高年代でチームを変えられる移籍の仕組みと風潮ができれば、もっと全体のレベルは上がっていくのだろうな、と思っている。

これらを附属高校蹴球部に当てはめるとどう思っていたのかは酒の席での話にさせてください。今の高校サッカー部は、いろんな形のチームがあって、俺たちの時代より良いな、とみています。

最後に、これは完全に個人的な見解であるが、部活が進学と生徒集めの手段になっている風潮は何とかならんかな、と思う。サッカーやスポーツをやっている、学校、勉強は何とかなるという仕組みは、本来の学校という目的からあまりにも離れすぎていないか？ これは部活の嫌な所、ですね。附属高校は当てはまらない所ですが、昔も今も文武両道が、目標に掲げられ、美談になるのは、それが簡単なことではないことの裏返しなのだな、ととらえています。

筑波大学附属高校蹴球部の近・現代史－1987～2024(概要)

2024.11.16.中塚義実

年度	1年	2年	3年	蹴球部顧問	蹴球部のトピック	サッカー・スポーツ界の動き(赤字は中塚関連)	
1987	98	97	96	79-00 顧問 伊藤良徳	年末にグラウンド改修(附属小で練習)	ソウル五輪出場を逃す	
1988	99	98	97				
1989	100	99	98			「アタキングティフェンス」で総体予選都ベスト20(?)	
1990	101	100	99				W杯衛星放送開始(イタリア) フットサルリーグ設立準備室第1回MTG(10月)
1991	102	101	100			102回に女子3名入部。村田女子商業と合同練習	W杯招致委員会発足(6月) 社団法人日本フットサルリーグ設立(11月) ヤマザキナビスコカップ決勝に56,000人の大観衆! 「はやくはじまれリーグ」
1992	103	102	101				
1993	104	103	102			合宿で「坊主戦」はじまる (京華との合同練習がこのころはじまる)	Jリーグ開幕(5月) 「ドーハの悲劇」W杯出場を逃す(10月) W杯はテレビ観戦(アメリカ) FIFAが「フットサル」を定める
1994	105	104	103				都高体連サッカー科学研究会発足(～2005) 各都道府県FAにフットサル委員会設置
1995	106	105	104			「好きだからやっている部活動を最後まで」 「引退なしのスポーツライフ」「3年の夏」 桐陰祭で「蹴球部合唱団」編成。大好評	DUOリーグ開幕(1996～2014フェアマン) 2002年日韓W杯決定(5月)/アトランタ五輪(7月)
1996	107	106	105			DUOリーグに2チーム参加。「院戦」をめぐる大議論 保護者会初開催(以後毎年開催) 部員資格の見直し フットサル同好会設立運動・頓挫	サロン2002発足(2014にNPO法人化)
1997	108	107	106				
1998	109	108	107		フットサル部門創設 校内フットサル大会初開催 夏合宿が「高萩大心苑」から「波崎」へ	W杯初出場(フランス) JFA指導者養成講習会・スポーツ社会学講師(～2012)	
1999	110	109	108	01-03 副校長			
2000	111	110	109		女子部門創設(111回生)	TFA主催レディースフットサル大会開催(2001年1月)	
2001	112	111	110		フットサル部門に新入部員(112回生) フットサル部門・女子部門が公式戦初参加	TFA主催U-18フットサル大会開催(8月と1月)	
2002	113	112	111		グラウンド改修(2002年4月6日オープン) クラブ長誕生(3部門で活発に躍動) W杯ハフリックビューイング等を企画	W杯(日韓共催)ベスト16。スカパーが全試合放送	
2003	114	113	112		女子が公式戦初勝利(対ハロワ)(2004年3月) 伊藤良徳先生退官記念行事(2004年3月)	U-18東京都プレリーグ(サッカー)開催(4月) 日本フットボール学会発足(9月) 東京都U-18公認リーグ(サッカー)中止! 東京都高体連研究部発足 国立大学法人化 JFALフェリエラレッジ・スポーツ社会学講師(～2015)	
2004	115	114	113				
2005	116	115	114			Tリーグ(都U-18リーグ)発足	
2006	117	116	115		「コンビニ事件」勃発(11月)	W杯出場(ドイツ) 「Eリーグ」(DUOの上位リーグ)発足 Fリーグ(フットサル全国リーグ)開幕(9月) 都U-18フットサルリーグ開催 第1回都U-18フットサルリーグ(4月) 自主企画の女子高生フットサル大会(12月) 若友サッカークラブ理事長(2008～17) 全国高体連研究部活性化委員会(08～19委員長) 注)2008は活性化プロジェクト	
2007	118	117	116	04兼任 04-05 創造部			
2008	119	118	117		3部門の独立＝校内的な承認 注)フットサルと女子は1年限定で「同好会」 「DUOリーグのトロフィーがない」→トロフィー完成(7月) フットサルと女子が「部」となる	筑波大学に五輪教育の組織(GORE)設置	
2009	120	119	118				
2010	121	120	119		2011年3月11日に東日本大震災⇒湘南戦中止	W杯ベスト16(南アフリカ) 「Eリーグ」ラストシーズン。地区トップリーグにDUO直結 筑波大学に五輪教育の組織(GORE)設置	
2011	122	121	120		チャリティフットボールフェスタ開催(4月3日) 「校外ラン」禁止を経てルール化	なでしこジャパン世界一! DUOから上位までU-18リーグがつつながる U-18フットサルの全国プレ大会(12年3月)	
2012	123	122	121		サッカー部・選手権大会進出	都女子ユースフットサル・プレ大会(13年3月) 『高校サッカー90年史』発行(7月)	
2013	124	123	122		桐陰祭:3部門で演劇に挑戦		
2014	125	124	123		校内フットサル大会・運営面の不手際で中止 南三陸町立歌津中招待サッカー(8月) 卒業生有志による現役支援開始	W杯(ブラジル)出場 第1回JFA全日本U-18フットサル大会	
2015	126	125	124		グラウンド改修 105回以来続いた桐陰祭への団体参加をせず サッカー部は「ゼロからのスタート」 校内フットサル大会再開	U-18フットサルリーグチャンピオンズカップ開催(17年1月) 筑波大学蹴球部創部120周年 日本部活動学会発足(12月) 都女子ユースに「渋谷109」が冠に(2018年1月) W杯(ロシア)ベスト16 『高校サッカー百年』刊行 自主企画の高校生女子フットサルチャンピオンズカップ(5月)	
2016	127	126	125				
2017	128	127	126		桐陰祭:3部門で演劇に挑戦		
2018	129	128	127		<公式戦出場100周年>		
2019	130	129	128		校内フットサル大会断絶 2020年3月:湘南戦中止 3ヶ月の休校。オンライン授業導入 部活動中止→制限付(1年生の入部は7月) 2021年3月:湘南戦はオンライン交流のみ		
2020	131	130	129	16兼任 馬術部 小林俊介		新型コロナのパンデミック 高校総体中止。TOKYO2020延期	
2021	132	131	130		コロナ下で多くの制限あり 2022年3月:湘南戦はオンライン交流のみ 校内フットサル大会再開(2023年1月) 2023年3月:湘南戦再開/春合宿実施	東京でオリパラが無観客で開催 WEリーグ開幕(9月) W杯(カタール)ベスト16。ABEMAで配信	
2022	133	132	131				
2023	134	133	132		フットサル部・東京都ベスト4(2024年1月) <創部100周年記念行事>2月23日	コロナの5類移行。Afterコロナの時代へ。 東京都U-18女子フットサルリーグ開幕 部活動の地域移行元年	
2024	135	134	133		コロナ制限撤廃	高校総体サッカーは福島(男子)、北海道(女子)で開催	